

41775

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 41-1974 |
| 01304 49253 |

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

3759
Y19
資料室



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

395.9
Y019

中央図書館

文部省檢定濟

昭和九年十二月二十六日 中國語文教科用

吉田彌平編
中國文教科書 卷三

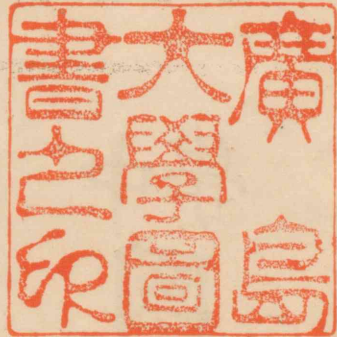
東京 光風館藏版

修正二十三版

広島大学図書

0130449253





中國文教科書 卷三

目次

| | | | |
|---|--------|------|---|
| 一 | 世々の恵 | 清原貞雄 | 一 |
| 二 | さわやかな心 | 河野省三 | 八 |
| 三 | 春の谷 | | 二 |
| 四 | 阿蘇と雲仙 | 八波則吉 | 三 |
| 五 | 佛法僧 | 高濱虚子 | 三 |
| 六 | 人の運 | 大町桂月 | 三 |
| 七 | 今 | 市島春城 | 五 |

| | | | |
|----|---------|-------|----|
| 八 | 燈影雜興 | 馬場孤蝶 | 五 |
| 九 | 蒲の花がたみ | 瀧澤馬琴 | 六 |
| 一〇 | 我等の東郷元帥 | 谷口尙真 | 七 |
| 一一 | 軍艦淺間より | 八代六郎 | 八 |
| 一二 | 羽州の鬼 | 橋南谿 | 九 |
| 一三 | 發明王エヂソン | 中原岩三郎 | 九 |
| 一四 | 空の感觸 | 野口昂 | 一〇 |
| 一五 | 我が家の富 | 徳富健次郎 | 一一 |
| 一六 | 淺草紙 | 吉村冬彦 | 一二 |
| 一七 | 豊臣太閤 | 三上參次 | 一三 |
| 一八 | 曾呂利が頓才 | 湯淺常山 | 一四 |

| | | | |
|----|------|-------|----|
| 一九 | 槍岳へ | 芥川龍之介 | 一五 |
| 二〇 | 新月 | 北原白秋 | 一六 |
| 二一 | 本多重次 | 新井白石 | 一七 |
| 二二 | 厨子王 | 森鷗外 | 一八 |
| 二三 | 氷川清話 | 勝海舟 | 一九 |
| 二四 | 南洲遺訓 | 西郷南洲 | 二〇 |



清原貞雄

倫理學者

文學博士

廣島文理科大學

教授

明治十八年(三四)

大分縣生

神武天皇

人皇第一代

御諱は神日本磐

余彦

鷦鷯茅草不合尊

の第四皇子

在位七十六年

壽百三

中國文教科書 卷三

一世々の恵

清原貞雄

我が國建國以來既に三千年、御代を重ねること、神武天皇以後を數へ奉つても百二十四代であるが、その御歴代の大方針は、終始一貫徳を以て民を治むるにあつた。

我が國に於て國民が如何に愛重せられたかを示す最もよい證據は、「だから」といふ言葉である。「だから」は今日では専ら貴重品を指す名稱であつて、「寶」の字が充てられてゐるが、

仁徳天皇

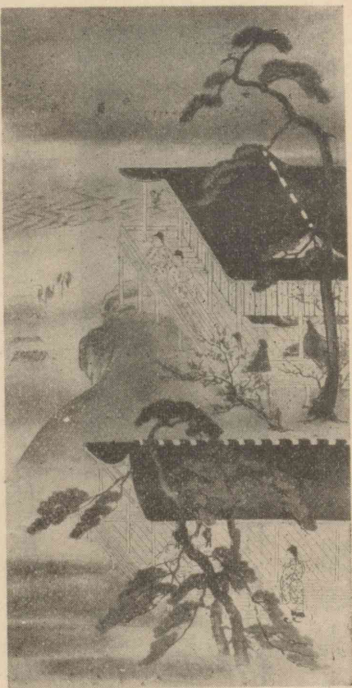
第十六代
御諱は大鸕鷀
應神天皇の第四
皇子
在位八十七年

昔から國民のことを大御たからと稱へてゐる。農業を以て生業の基礎とし、國本とした我が古代に於ては、國民の大部分が農民であるから、農民を現す言葉はそのまゝ國民全體を指す言葉になつたのである。仁徳天皇が民の窮乏を見そなはして、宮室の頽廢するのをもおいとひなく、數年にわたつて課役を御免になつたことは、何人も熟知する所である。天皇の御言葉に、「それ天の君を立つるは、これ百姓の爲なり、されば君は百姓を以て本とす」とある。こゝに百姓といふは、もゝのかばねで、即ち國民のことである。この御言葉は、君先民後の原則の上に立國してゐる我が國體に在つては、國民の方からは斷じて申すべきではない。しかし

雄略天皇

第二十一代
御諱は大泊瀬
允恭天皇の第五
皇子
在位二十三年

天皇の御言葉として拜するときは、民を重んぜさせ給ふ大御心のあらはれとして、只管感泣する外は無いのである。雄略天皇の御言葉に、「義は則ち君臣にして、情は父子を兼ね



高津宮
冷泉爲恭筆

たり」とある。これと同じ意味の御言葉は、その後御歴代の詔勅の中に屢、繰返され

てゐる。「義は君臣にして、情は父子を兼ねる」といふことは、我が國の社會組織即ち綜合家族制からも言ひ得るのであるが、こゝでは唯父母のその子に對するが如き深き愛情を

醍醐天皇

第六十代

御諱は敦仁
宇多天皇の第一

皇子

在位三十三年
延長八年(九五〇)

崩

壽四十六

文永・弘安

龜山天皇の文永
十年(九三三)及び

後宇多天皇の弘
安四年(九四三)に

於ける蒙古の襲
來

龜山上皇

第九十代

御諱は恆仁

後嵯峨天皇の第
三皇子

在位十五年
嘉元三年(九六一)

崩

壽五十七

以て國民に臨ませ給ふ大御心を宣べさせられたものと拜

せられる。

醍醐天皇が寒夜御衣を脱がせられて民の苦しみを察し

遊ばされたことは、何人も拜承してゐる所である。文永・弘

敵国降伏

醍醐天皇の蒙古襲來の國難に際して、
龜山上皇は御身を以て國難に
代らせ給はんことを伊勢神宮

に御祈願あらせられた。

世のために身をば惜しまぬ心とも荒ぶる神は照らし見

るらむ

とは當時上皇の詠ませ給うた御製である。

明治天皇の御製の中には、畏くも「國のため民のため」といふ

大御心を詠ませられたものが極めて多い。今謹んでその

數首を次に掲げ奉らう。

ちはやぶる神ぞ知るらむ民のため世を安かれといのる

心は

とこしへに民安かれと祈るなる我が世をまもれ伊勢の

大神

國のため民のためには夏草のことしげくともつとめざ

らめや

あかつきのねざめしづかに思ふかな我が政いかゞあら

むと

暑しともいはれざりけり煮えかへる水田にたてるしづ
を思へば
照るにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草のうへはい
かにと

後鳥羽天皇

第八十二代
御諱は尊成
高倉天皇の第四
皇子
在位十五年
延應元年(八九九)
崩
壽六十

この畏き大御心は、實に我が皇室の傳統的御精神であらせ
られる。随つて代々の天皇は皆この大御心を以て國民に
臨ませられたのである。それは左に掲げ奉る多くの御製
を拜讀しても窺ひ知ることが出来る。

後鳥羽天皇御製

夜を寒みねやの衾のさゆるにもわらやの風を思ひこそ
やれ

後宇多天皇

第九十一代
御諱は世仁
龜山天皇の第二
皇子
在位十三年
正中元年(八九四)
崩
壽五十八

後宇多天皇御製

いとまた民安かれと祈るかな我が身世に立つ春のは
じめに

伏見天皇御製

いたづらに安き我が身ぞ恥づかしき苦しむ民のこゝろ
思へば

後醍醐天皇御製

世治り民安かれと祈るこそわが身につきぬ思なりけれ
これらの御製を拜誦すれば、餘りの忝さ勿體なさに、覺えず
涙ぐまれる。我が國特有の皇道は、かくの如く御歴代の大
君の民を愛重せさせ給ふ大御心によつて發達し完成した

後醍醐天皇

第九十六代
御諱は尊治
後宇多天皇の第
二皇子
在位二十二年
延元四年(九九九)
崩
壽五十二

のである。(提日出る國)

河野省三

國學者

文學博士

國學院大學教授

明治十五年(三四)

埼玉縣生

明治神宮

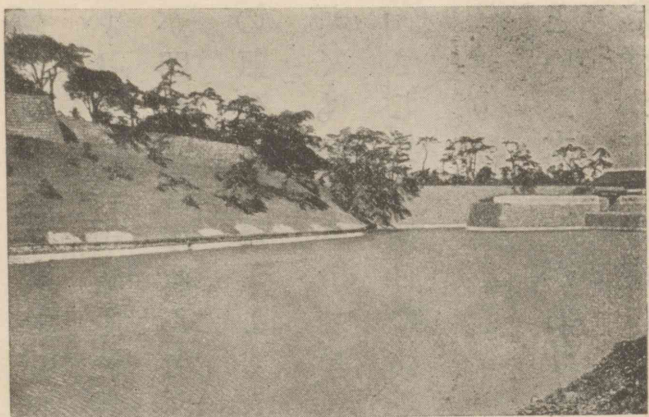
東京市澁谷區代

代木に鎮座

祭神は明治天皇

並に昭憲皇太后

晴渡つた日に、東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、私どもは何となく麗しい崇高な氣分に打たれます。又朝日に匂ふ山櫻の姿を眺めますと、自然に晴れ〜したみやびやかな氣分になります。又日の丸の旗がひら〜と軒先に翻つて居るのを見ますと、そこに活動的な生き〜とした氣分が起つて來るのであります。或は又かの明治神宮に參拜いたしましたして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をく〜り、吸込まれるやうに清淨な參道を進み、清い水に口と手を



清めて御社殿の前に參りますと、おのづからすが〜しい尊い氣分に包まれて來るのであります。更にもまた、松の緑滴る二重橋の前に立つて、我が皇室のみ榮を祈ります時に、何ともいへぬの神聖な氣分が横溢して來るのは、争はれない事實であります。これらおの神々しく、すが〜しく、晴れ〜しい心持こそ、實にわれわれ日本人が、遠い〜昔から養つて來た心の純眞な姿であります。建國以來、私どもの祖

先が育てあげて来たこの純眞な心は、全くわが國民性の本質でありまして、いはゆる大和魂の神髓であります。かういふさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充滿した心が、即ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれらの氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。明治天皇の御製に、

さし昇る朝日の如くさわやかに
もたまほしきは心なり
けり

といふ大御歌がありますが、そのさわやかな心は、取りも直さず、かやうな純にしてすなほな氣分に外ならぬのであります。このさわやかな心は、私どもが、この世に於て日々の

生活を營むに當りまして、最も必要なものであることは疑ありません。

このさわやかな心は、晴れど、しい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、又みだりに他を排斥しない、穩かな心であります。この心からして、かたよりの無い、さわやかな氣分を味はふことが出来るのであります。

さわやかな心は、明快な、裏表のない心持であります。この心に基づく、温みのある、生きくとした生活は、最も望ましい生活であります。この心に基づく、偽らない、正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命も亦こゝにあ

朝日の豊榮登る

朝日の豊榮登りに稱辭竟へまつらくと宣る
(祈年祭の祝詞)

ると信じます。主かの天真爛漫といふのは、即ちこのさわやかな心の本體であります。さわやかな心は、又清らかで、温みのある、生きくとした心持でありまして、建設的に、有意義に、總べてのものを生かして行くところの積極的精神であります。いはゆる「朝日の豊榮登る」氣分が、即ちこのさわやかな心の働であります。我々日本人は、かういふさわやかな心を根柢として、この尊い國體を築き上げ、この立派な國民道德を形づくつて來ました。我々日本人の國民精神の現れである神道は、即ちこのさわやかな心をもつてその根本としてゐるのであります。神道については色々の説がありますが、畢竟はこのさ

わやかな心、純眞な氣分に生きるところの日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。この神



花 櫻

道の精神を最も明らかにした一人は、今から百五十年前に伊勢國松坂にあつて天下の學界を風靡した、本邦空前の國學者本居宣長であります。この人の

詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人間はば朝日に匂ふ山ざくら花

といふのがあります。この歌こそは正しくこのさわやか

伊勢松坂
三重縣(伊勢國)
飯南郡松坂町
本居宣長
徳川時代の國學者
國學四大人の一
享和元年(三六二)
薨
年七十二
贈從三位

なやまと心の姿を稱^たへたものであります。宣長は全生命を捧げて、このやまと心の神髓を發揮すべく努力した人であります。我々日本人の持つてゐる心の本來の姿に存するところの感情の美は、^{外見}しさ眞心の尊さを、力を極めて説いた人であります。さうして、ひたすらに我が皇室を崇め我が國家を愛する道を力強く主張した人であります。朝日に匂ふ山櫻花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。いやみとか毒々しさとかいふところは、つゆちりほどもありません。しかも何となく奥ゆかしさを持つて居ります。そこに私ども日本人としての心の特色が現れてゐるのであります。我々日本人

の祖先は、かういふ心持を「明き、淨き、正しき、直き心」とも申しました。道德の根柢となる心はこゝにあると信じてゐたのであります。

かういふさわやかなやまと心を本質とする神道は、たゞこのみやびな心を心として、一途にわが皇室を尊び、わが國家を愛して來たのでありますから、神道の信仰が吾人の心に自然に存して居ることは明らかであります。神社は我が神道を形に生かしたものであります。彼の鳥居といひ、鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、いづれも皆、清淨・簡素を尙んでゐます。神社にお参りいたしますと、私たちの心はおのづからすがくしい、さわやかな氣分になつてしまひま

西行
山家集
實朝
全栞集

五十鈴川
皇大神宮のほと
りを流れてゐる

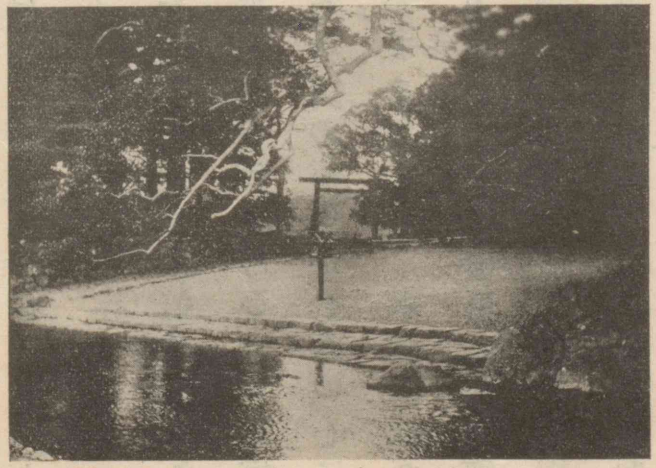
西行法師

俗名佐藤義清
鎌倉時代の歌僧
建久元年(八五〇)
寂
年七十三

何事の
「大神宮の御祭
の日よめる」と
詞書して「山家
集」に出てる

す。ことに五十鈴川の清い流に二千年の昔から鎮座まします皇大神宮にお詣り致しますと、何人も西行法師と同じやうに、

何事のおはしますか知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ
といふ感じに打たれないものはありますまい。この何とはなしに感ぜられる尊い心が、すなはち日本人の神に對する純眞な心の姿で、最も氣品の高い宗教的情操であります。私たちは常にこの尊い情操即ちさわやかな心を忘れないやうに修養しなければなりません。



川 鈴 十 五

明治天皇の御製に
浅みどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな
といふ大御歌がありますが、私どももこれにあやかつて、かやうな天空海潤の氣分を持ちたいものと常々念願してをるのであります。
少し餘談にわたるやうであります。私は先年明治神宮の寶物殿を拜觀いたしましたして、御質素な數々の御調度品の中

にある二つの銅製の置物について深く感激いたしました。皆様も御覧になりましたらうが、二つとも高さ纔かに七センチほどの置物ですが、一つは、一兵士が期満ちて除隊され、今將に郷里に歸らうとして、左の手に大きな柳行李をかゝ



二宮尊徳 欣然として營門を出ようと
してゐる軍服姿であります。
次 金 宮 二
郎 次 金 宮 二
もう一つは二宮尊徳がまだ金

二宮尊徳
通稱金次郎
農政家
相模國(神奈川
縣)生
安政三年(二五六)
卒
年七十
贈從四位

くも大御心を慰め奉つたことを想像いたしますと、私はそぞろに目頭が熱くなつてまゐります。私はこの置物を通じて、明治天皇の深遠測るべからざる思召と、いかにも純潔でさわやかにおはします大御心とをしのび奉らざるを得ないのであります。

私は明治天皇に因^{ちよか}あるいま一つの美はしい御話を申し上げたいと思ひます。それは今より二十幾年の昔、明治天皇の御一年祭の行はれた當時のことでした。或地方の小さな町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、程よく隔つたところに並



兵隊除

伏見桃山
京都市伏見區に
ある丘陵

びました老幼男女は、その町長を始として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。その式におくれた町民たちは、いづれも静かに榊葉の立つ祭壇の前に進んで、恭しく遙拜しては退出しましたが、その中に年の頃五十歳ぐらゐの八百屋さんがありました。この人はつゝましやかに祭壇の前に立つて伏拜みましたが、やがて徐に左の小脇から綺麗にたばねた一束の生薑を取出して丁寧祭壇に捧げ、一歩さがつて最敬禮をして退いたのであります。これを目撃しました私は、まことに涙ぐましい感に打たれたのであります。

我々日本人の心の底には、上は高貴の御方より下は津々浦



生薑の束

浦の民衆に至るまで、かういふ飾りけのない、すなほで、しかも清らかな純情が湛へられて居るのであります。私たちはこの心を日々の生活にうつして、物を清らかにし、心をさわやかにし、そして偽らざる力強い社會を築いて行きたいものと思ふのであります。私はこのさわやかな心を基礎とした生活を、常に「快活にして眞面目な態度」と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目な所に、一番よくその眞價を發揮するものであると信じます。(ラヂオ講演集)

三 春の谷

落合直文

號は萩の屋
國學者・歌人
仙臺生
明治三十六年(二
五〇)歿
年四十三

筆蹟

門松

ひとつもて君を
いはむむひとつ
もておやをいは
はむふたもとの
松 直文

金子薫園

名は雄太郎
歌人

明治九年(二五五)
東京生

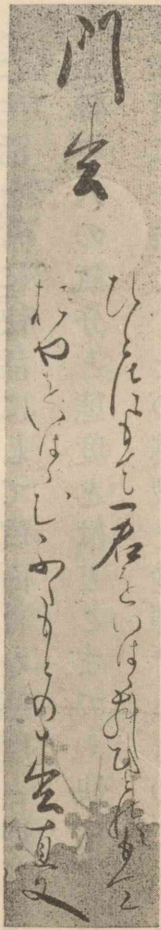
尾上柴舟

名は八郎
國文學者・歌人・
書家

文學博士
東京女子高等師
範學校教授
明治九年(二五五)
岡山縣生

落合直文

櫻見に明日はつれてと契りおきて子は寝ねたるを雨
降りいでぬ



筆文直合落

金子薫園

枯蓮にうすれし夕日かげ消えて水音寒く鴨二つ飛ぶ

尾上柴舟

春の谷あかるき雨の中にして鶯鳴けり山のしづけさ

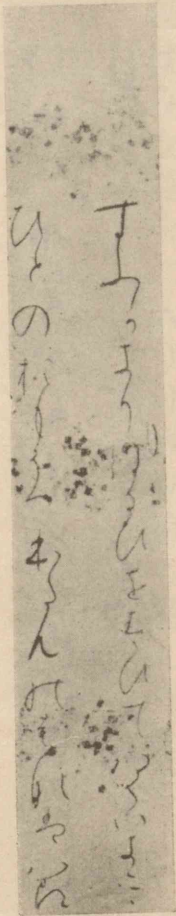
太田水穂

枇杷の葉に雨あらく降るこの二日雞頭の色とみにあ

せたり

窪田空穂

秋のそら晴れて雲なし大がらすおり來てとまる稻城
の上に



筆舟柴上尾

與謝野晶子

天の川いつ見えそめむあきつなど飛びかふ空の青き
夕ぐれ

太田水穂

名は貞一
歌人

明治九年(二五五)
長野縣生

窪田空穂

名は通治
歌人

明治十年(二五七)
長野縣生

筆蹟

すふかきりはる
ひをすひてはく
いきにひとのお
もうつぼたんの
はなは 八郎

與謝野晶子

歌人

明治十一年(二五三)
堺市生

前田夕暮

名は洋造
歌人
明治十六年(三五)
三) 神奈川縣生

明日越ゆる山に光の赤くさし暮れゆくが見ゆ旅人の
眼に

前田夕暮

筆蹟

わが門ゆながむ
る富士はおほか
たは見つくした
れどいよ飽か
ぬかも 牧水

わが門ゆながむ 富士はおほか
たは見つくしたれどいよ飽かぬかも
若山牧水筆

若山牧水

名は繁
歌人
宮崎縣生
大正四年歿
年四十五
北原白秋
名は隆吉
詩人・歌人
明治十八年(三四)
三) 福岡縣生

摘草のにほひ残れるゆびさきを洗ひてをれば野に月
の出づ

若山牧水

北原白秋

晝ながらかすかに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消え

たり

石川啄木

石川啄木

名は一
歌人・新聞記者
岩手縣生
大正三年歿
年二十七

たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三
歩あゆまず

土岐善麿

土岐善麿

歌人・新聞記者
明治十八年(三四)
三) 東京生

雞はみな雞舎に入りけり夕庭の椿の葉こそしづかな
りけれ

八波則吉

雲仙

熊本縣の北東部
から大分縣に跨
る活火山
長崎縣島原半島
に峙つ活火山
八波則吉
國文學者
第五高等學校教
授
明治九年(三六)
福岡縣生

四 阿蘇と雲仙

自分は第一印象を貴ぶ。第一印象は時に認識不足の誤謬
に陥ることもあるが、大體に於て物の真相を攬むことが出

来る。何となれば、始めて物を見る時には好奇心が伴なつてゐるので、緊張して、神経が尖鋭化するからである。初對面の觀察は十中八九は誤らない。而してこの第一印象はその後容易に改められないものである。

自分は雲仙の第一印象に靜の美を認め、阿蘇の第一印象に動の美を認めた。爾來何年たつても今にその誤つてゐないことを確信してゐる。

雲仙に始めて登つたのは五六年前の初夏であつた。島原町を離れると、麥畑には麥の穂が出揃つて、空には雲雀が轉つてゐた。自動車で登山道路を急カーブした時、運轉手が急に車を停めて、

島原町
長崎縣南高來郡
にある小市街

Curve カーブ
屈曲 彎曲

閑院の宮様

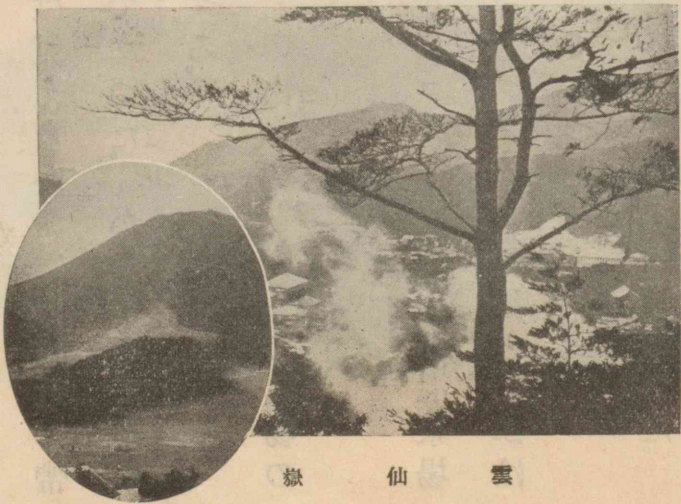
載仁親王
元帥
陸軍大將
大勳位
慶應元年(二三三)
御生誕

天草灘
九州天草島の西
方にある一帯の
海洋

宇土半島
熊本縣の西南岸
に突出し島原灣
と八代海とを隔
ててゐる半島

「こゝは閑院の宮様の御展望遊ばした處です。」

と言つた。車を出て見ると、まあ何といふ綺麗な眺望だらう！眼下に天草灘を見下して、大小數十の島々が碁布してゐる。その島々の間に眞帆片帆が點在してゐる様は、さながら大きな盆景である。しかも宇土半島から阿蘇へかけての丘陵山嶽が蜿蜒として雲煙模糊の裡に起伏してゐる。運轉手は、



嶽 仙 雲

卯の花



普賢岳
雲仙嶽中の一峯
地獄
新湯の地獄
普賢岳の山腹に
ある温泉の涌出
する所
ゴルフ
一種の打球
ゲーム
ホテル
旅館

「あれに阿蘇の煙が見えます」と指した。近視の余にはそれは見えなかつたが、附近一帯は實に繪のやうに静かな美景であつた。かう書いてゐる今でも、その美景が眼前に髣髴する。山の木々は若葉して、卯の花らしい白い花を交へて、名物の躑躅がそこゝに咲いてゐた。

普賢岳には登らなかつたが、芝生のゴルフ場といひ、温泉場のホテルといひ、皆靜の美觀を呈してゐた。地獄といふは名のみで、その實は極樂の靜かさであつた。これを要するに、初夏の雲仙は靜の美そのものであつた。これに反して阿蘇は動の美である。



阿蘇と雲仙

五高
第五高等学校
熊本縣熊本市に
ある

よな
噴火口からふき
出す黄土（九州
の方言）

自分が始めて阿蘇に登つたのは五高の生徒時代であるから、今からざつと四十年以前である。當時汽車も自動車もあらう筈がないから、一行數十名の生徒は三日がかりで歩いた。頂上に登つた日は珍しく荒れる日であつた。よなが雨の様に降つて、度々眼鏡を曇らせた。茶屋の屋根には、よなが一寸餘も積つてゐた。さなきだに一木一草もないこのあたりに灰色のよなが霽をかけてゐるので、いかにも荒涼たる光景であつた。さて噴火口はと見れば、これは又何といふ凄絶な光景だらう。もくくと渦巻き騰る黒煙の中に火柱が立つて、時々頭大の熔岩が迸出してゐる。大地を揺がす轟々たる鳴動

は耳も聳せんばかり。平素傲語する我等青年輩も、たゞ一

團となつて、僅かに呼吸するのみであ

つた。動の美——今にして思へば、い

はゆる壯美はその日の阿蘇の壯觀で

あつたらう。

歸途、數鹿流の瀧を見て、此處でも動の

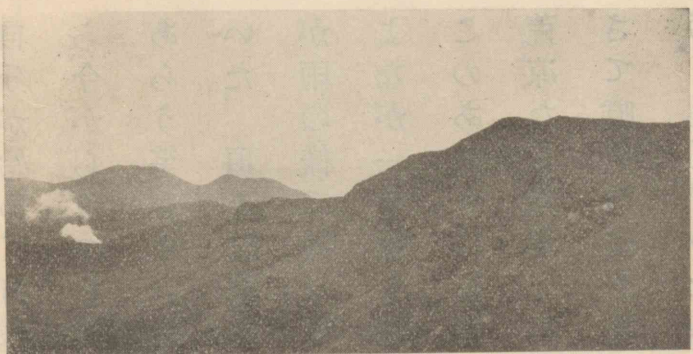
美を認めた。今や阿蘇には登山バス

も通つて、一日の中に熊本から容易に

往復することが出来るやうになつた。

けれども自分は、四十年後の今日まで

再遊を試みない。これは往時の第一



阿蘇

數鹿流の瀧
熊本縣阿蘇郡瀬
田村字立野の東
にある瀑布
バス
乗合自動車
熊本
熊本縣熊本市

印象を傷つけないためである。阿蘇

には、或は殆ど煙さへ立たない和いだ

日があるかも知れない。若し偶、そん

な日にでも登り合はせたら、數十年來

の第一印象はめちやくに壞される

であらう。出来ることなら、自分は青

年時代の第一印象をだきしめて、終生

動の美の阿蘇を追憶したいと思つて

ゐる。

因みに、自分はまだ一度も富士に登ら

ない。上京の途、汽車の窓から富士を眺めてその美觀に打



山

たれ、靈峯富士は仰ぐべき山で、踏むべき山ではない。と思つた初一念を貫きたいためである。雲仙には紅葉の頃もう一度登りたいと思つてゐる。満山の紅葉がたとひ夕陽に映えて燃えるやうに見えても、静の美を傷つけないであらう。雲仙と阿蘇とが、どちらも国立公園に選定されたのは意義あることだと思ふ。(隨筆高きに登る)

五 佛法僧

高濱 虚子

正岡子規の弟子
高濱虚子
名は清
俳人・小説家
明治七年(五三四)
愛媛縣生
奥の院
和歌山縣伊都郡
高野山金剛峰寺
なる奥の院

夕飯の済んだ後、今夜奥の院に行つて佛法僧の啼聲を聞いて来るから、提燈を貸してくれたまへ」と給仕の小僧さんに

いふと、「畏まりました」と、小僧さんは笑ひながら膳を下げて行つたが、いくら待つても来ない。一時間もたつてから、「本當に行くのですか」と聞きに来る。「勿論本當に行くさ」と答へると、「途中で何か出ますよ」といふ。「何か出る。猿でも出るか」と聞くと、「新墓から幽霊が出ますよ」といふ。晝間通つて見た時は



高野山
宮澤鐵筆

大名などの古い墓ばかりが目についたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽霊位何でもない」と元氣なことをいつ

二つ巴の紋の
提灯



土蜘蛛
能の土蜘蛛によ
つて仕組んだ芝
居で蜘蛛の精を
源頼光が退治す
るところ

てやる。小僧さんは又薄氣味の悪い、いやな笑ひやうをし
て降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋のついてゐる大き
な提燈を持つて来る。さうして「幽霊の外に野衾も出るさ
うですから、氣をつけなさい。若し二時間もたつてお歸が
無かつたら、お迎に行きます」と、しやれたことをいふ。
小僧さん自身に提燈をつけてくれて「表門は締めてしまつ
たから、裏口から御案内しませう」と先に立つ。この小僧さ
んは十六だといふに、馬鹿に背が低い。それが大きな提燈
をさげてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな
恰好だ。下駄をはいて臺所の横にまはる。廣い臺所には
燈が一つともつてゐるばかりだ。暗やみの中に、二三人の

小僧さんが笑ひながら我等を見送つてゐる。それが提燈
の光で纔かに見える。がりがりと音がしたのは、お城で見たことのあるやう
な岩乗な裏門のくゞり戸を



高野山奥の院道

小僧さんが先に立つてあげ
てくれた時、鐵の鎖の戸に軋
のる音であつた。小僧さんが
道突きだす提燈を受取りなが
ら、友と二人で表に出る。表

は暗い。星はあるが、纔かに寺の白い土塀と道との區別が
つく位だ。提燈を便りにその白い土塀に沿うて表通の奥

の院道に出る。門前の數珠屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が襖の如く連なつてゐる。その左右の襖で立てきつた中に、帶のやうに幅の狭い空が見える。その空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。しかもその一帯の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提燈の光で纔かに足許を探つて歩く。晝間は氣がつかなかつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。その木の根は左右に伸びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。友は提燈をさし上げて、その杉の幹に押

雨月物語
上田秋成著
擬古文で怪談を
書いた短篇物語
集
こゝは同物語に
ある豊臣秀次の
亡霊の話などを
さすのであらう

しつけるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。寐鳥の起つ音がする。見ると、提燈の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高いく杉の梢をさまよつてゐる。寐鳥が泡を食ふのも尤だ。歩きながら友に「雨月物語」の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつてゐる。どうやら心細くなる。かういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に薄ぼんやり明るいものが見える。何であらうかと氣にしなから行くと、突然

木の間に空が見えて、そこに鎌のやうな三日月が懸つてゐる。

向ふからふら〜と提燈が一つ来る。急に見えなくなるのは杉の木に隠れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひざまによく見ると、釣狐の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい燈が三つともつてゐる。近寄つて見ると、御廟の橋だ。友が橋の上から提燈をつり下げて水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちら〜と流れてゐる。燈籠堂はもうすぐそこに在る筈だが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すつか

釣狐

狂言の曲の名

一名こんくわい

白藏主

狐を釣る獵師の叔父に當る坊主

玉川

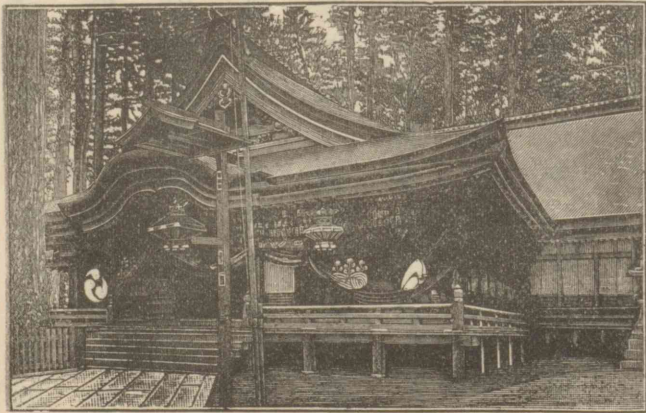
高野山中の溪流
日本六玉川の一

り四周の蔀を下して、寂然として寐静まつてゐるやうだ。

數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、寂しくも嚴かであらうと思つて楽しみにしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に沿うて御廟の前に入る。

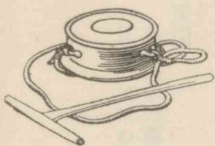
御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六箇の小さい釣燈籠がともつてゐる。その光で纔かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立とが見える。

この線香立には、



高野山燈籠堂

鉦



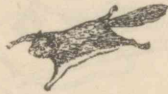
晝間見たときは煙が雲の如く渦巻いて居つた。その煙の中に數珠をくすべたり、鈴をくすべたりしてゐた信者が今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も上つて居らぬ。提燈をその中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に赤い紙で包んだ線香の燃えさしが四五本殘骸を留めて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然として靜まりかへつたところを見ると、愈、偉大な線香立である。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて縁に置かれた提燈の燈が心細さうに瞬いてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうな

よい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はない筈なのに、不思議だと思ふ。その鉦の音に聴きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたましい啼聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな、殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、今の啼聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をしたやつで、忽ち空中から落下し來つて、提燈をさらつて行くやうなことはあるまいかと氣になる。氣のせぬか、提燈の燈は一層心細さうに瞬いてゐる。

小さい咳拂が聞える。おやと思ふうちに又一つ聞える。その邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子にちよつとした明りがある。こゝは晝間線香などを賣つてゐた處であるから、すぐに番人の部屋と想像がつく。試にその傍に行つて、「もし〜」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「ちよつと伺ひますが、あのおそろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です」といふ。「へえ、何といふ獸です」と聞くと、「野衾」というて、蝙蝠のやうな、鼯のやうな、妙な恰好をした獸です」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれはどこですか」と聞く。番人はちよつと黙つてゐたが、

野衾



「あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です」といふ。鉦の音かと思つてゐたのが鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞くために來た佛法僧であつたのは愈、意外であつた。「あれが佛法僧ですか」といつたまゝ暫く無言で三人とも耳を傾けた。やはり、かん〜〜〜と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前に、ぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高く返えた音が響く。つまり、ぶつかん、ぶつかん」と鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、「雨月物語」には佛法といふ字

にわざく「ぶつばん」と假字が振つてあつて「ぶつばんく」と鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲は「ぶつかんぶつかん」と聞えるが、先づ「雨月物語」の「ぶつばん」に近いやうだ。妙なもので、始は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは、正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。はじめ鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、生き物の喉から出る聲だと知つてから、その金鈴の響に潤のあることに氣がつく。番人が「大概夜中の二時から三時頃にならぬと鳴かんのに、今晚は宵の口から頻に鳴いてゐた」といふ。さういふ内も絶えず「ぶつかんく」と聞える。普通の鳥とは餘程違つて

ある。法の御山の靈鳥として恥づかしからぬ不思議な鳥だ。古來幾多の詩歌がこれをもてはやしたのも尤だ。



佛 法 僧
森 一 鳳 筆

私は嘗て、高野の山の靈山であることは奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々、杉は物かは、ひとりこの

佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると、遙か彼方の縁に置かれた提燈の燈も今は靜かにもつてゐる。

番人は寂しい燈籠堂の夜陰に偶、話相手を得たので、問ひもせぬのにいろく話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも、この燈籠堂で焚く油は夥しいことで、月に一石から二石の間を往來してゐる。殊に三月二十一日の御影まげ供の時は、一石の油を焚くといふことや、貧の一燈の燈は信者の所望によつて線香に移してやる、それを北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふことなどは面白かつた。

歸途に就く。

御廟の橋にかゝつた時、友が「また鳴く」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提燈が一つ來る。女が三人に男が一人、南無大師遍照金剛と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

(千五代將軍)

六人の運

大町桂月

運は躁急の人を去つて、勇往の人に来る。「急がば廻れ瀬田の長橋」と、古人は躁急の人を戒めたるにあらずや。「待てば海路の日和」とも戒めたるにあらずや。「急がずば濡れざらましを旅人の後より霽るゝ野路の村雨」と太田道灌も歌へ

大町桂月
名は芳衛
文章家
高知生
大正十四年歿
年五十七
急がば廻れ
ものゝふの矢ば
せの舟は早くと
も急がばまはれ
瀬田の長橋(連
歌師宗長)
太田道灌
名は持資
足利時代の武將
扇谷上杉氏の臣
文明十八年(三四
〇)薨
年五十五
贈従三位

この手紙は
小早川隆景の話

るにあらざや。「人の一生は重荷を負うて遠き路を行くが如し。急ぐべからず」と、家康も遺訓を垂れたるにあらざや。羅馬は一日にして成りたるものにあらず」といふ西諺もあるにあらざや。「この手紙は



書齋の大町砦月

急ぎの手紙なれば、ゆつくり書け」といひし賢き人もあるにあらざや。われ旅行慣れざる人の歩きぶりを見るに、むやみに急ぐ。それも僅々五六里の路ならばそれにてよけれど、十里以上となれば忽ちたふるべし。何ぞ朝出づる時の威勢よくし

て、晩宿につく時のぐだぐだしたるや。一二日の旅ならば、急ぎて行くことを得べけれども、一週間以上の旅は出来ざるべし。旅慣れたるものは、朝出づる時も、晩宿に就く時も同じ歩調なり。今日も明日も明後日も、十日の後も二十日の後も、行程に變りはなし。かくて平氣にて千里を踏破するを得るなり。

人生の旅もこれに同じ。躁急なるものは早くたふるべし。折角の秀才が學校を出でて間もなく夭折するは、學校時代に急ぎ過ぎたるなり。東海道五十三次は走り通しに走られざるにもあらざ。走れば歩く人よりは早く京都に着くべし。その代りに途中の風景事物は一向眼に入らざるな

東海道五十三次
江戸から東海道
を通つて京都に
至る道々の宿場
五十三

参議
明治維新の後太
政官内におかれ
た高官

囊中の錐
夫レ賢士ノ世ニ
處ルヤ、譬ヘバ
錐ノ囊中ニ處ル
ガ若シ。其ノ末
立チドコロニ見
ハル。史記、平
原君傳

り。人の年齢によりて大別すれば、青年時代は走るものなり。壯年以後は歩くものなり。走るには走れど、平地を走るなり。歩くには歩けど、山坂を歩くなり。走るは早けれど、思慮分別は出来ず。歩くは遅けれど、思慮分別が出来るなり。書生が一躍して参議となりしは、明治の初の一夢なり。社會の秩序整ひたる今日にては、一步々々階段を踏んで進まざるべからず。随つて大いに達せんとせば、長命ならざるべからず。待てば長きやうなれども、囊中の錐豈穎脱せずして已まんや。人は少時より身を終ふるに至るまで、よく勉めよく^{努力}勉むといふことが必要なり。いづれが主かといへば、無論勉むることなり。勉めんが爲に遊ぶべし。

遊ばんが爲に勉むべからず。いつも餘裕を存して、しかも腹中には絶えず精力充滿し居らざるべからず。精力充滿すれば、如何なる場合にも勇往す。急ぐは不可なれども、ぐづらぐづらして居ては、斷じて好運を得難し。流るゝは水の性なり、動くは人の性なり。動いて進め。雨降らん、風吹かん、嶮山あらん、荒浪あらん、障害あらん、艱難あらん、攻撃あらん、非難あらん、貧苦あらん、病魔あらん、惡魔あらん。苦しきこと多けれども、それを排して進むに非ずんば、好運の樂土に達する能はざるなり。西諺に曰く、「怯者は不運を恐る、不運は勇者を避く」と。(桂月全集) 人の運

七 今

市島 春城

市島春城
名は謙吉
早稻田大學名譽
理事
萬延元年(1860)
新潟縣生

私はいくら字書をくりかへして見ても「今」といふ字よりより以上の力強い字を發見することは出来ない。古來の賢哲は萬世にかゝやく幾多の金言を遺したが、しかし「今」といふ語以上に力強い語を案出したものはない。「今」といふ語こそは、正にこれヒ首肺肝を刺すものである。人生唯「今」あるのみ。昨日は過ぎ去つた「今」であり、明日は將に來らんとする「今」である。回顧は死屍を追ふもの、豫想は幻影を捉へんとするもの。唯現に實在するものは「今」のみである。日月推移し、動植物代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻と移り行く「今」こそ宇宙の姿である。

これを我等の日常に見ても「今」といふ一瞬間程大切な時は無い。事の成るも敗るゝも「今」に在る。「今」といふ一瞬は活機である。この瞬間こそ髓の中心までも振り起す力がある。「今」の外に、既往と未來とがあるやうに見えるが、畢竟既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生れない陰影であつて、そこに何物も無い。葬つた昔を語るは死兒の齡を數へるもの、來年の事をいへば鬼も笑ふ。既往は追ふべからず、未來は期し難い。唯力強く迫つて來るものは「今」といふ一瞬のみである。既往に善なるもの偉なるものがあつても、それはその當時の「今」に於て成つたものだ。更に再び善なるもの偉なるものを求めようといふには「今」これ

今日爲さずとも
明日アリト謂フ
コト勿レ。今年
學バズトモ來年
アリト謂フコト
勿レ。(宋の朱
熹)

を爲すの外は無い。
今日爲さずとも明日があるといふが如きは、天地不息の大
道に背いて自ら死滅を求めたものである。これを未來に
期するといふが如きは、永久に失つてもいゝといふに同じ
である。未來といふ境地が別に存するのではない。現在
の推移……これがやがて未來である。未來を期するとい
ふのは、畢竟薄志弱行者の遁辭に過ぎない。未來といふ空
虚なるものを假定するのは愚である。なぜ直に起つて「今」
これを爲さないか。期しがたい假定に遁れて未來を口に
するのは、むしろその優柔怯懦を自白するものである。故
に私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷乎として「今」の一瞬を守る。

一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注することによつ
て、始めて大成を期し得るのである。「今」を外にして競争場
裏に立つことは難い。闘は「今」である、勝敗は「今」の一瞬に在
る。「時は今」と叫ぶとき、そこ

に果斷の決心が生じ、剛健の
意思が萌し、邁往の勇氣が湧
き、奮闘の努力が生れる、この

間一毫の弛緩を許さない。

かくて全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して
大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

黒田如水が或時豊太閣に向つて、殿下の成功には必ず秘訣



水 如 田 黒

精神一到

陽氣ノ發スル處
金石モ亦透ル。
精神一到セバ、
何事カ成ラザラ
ン。(宋の朱熹)

黒田如水(梅田) 名は孝高
豊太閣の謀臣
後徳川家康に仕
へた
慶長九年(一六〇四)
薨
年五十九
贈従三位

がござりませう。どうか承りたいものでござります」と問うた。すると、太閤は笑つて、別に秘訣は無い。唯過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不亂に爲したに過ぎぬ」と答へたといふ。曠世の英雄豊太閤も亦「今の禮讚者であつたのである。」(春城筆證)

八 燈影雜興

馬場 孤蝶

夜の趣は燈火にある。夜の闇は燈火によつて命を得る。空に雲が鎖して、黑白も分らぬといふやうな如法の闇は勿論のこと、何でも無い畦の小川にさへ、見るに足らぬ道端の雑木にさへ、いひ知らぬ趣のある姿を與へる月の夜でも、そ

馬場孤蝶
本名は勝彌
翻譯家・隨筆家
明治二年(三三)
土佐國(高知縣)
生

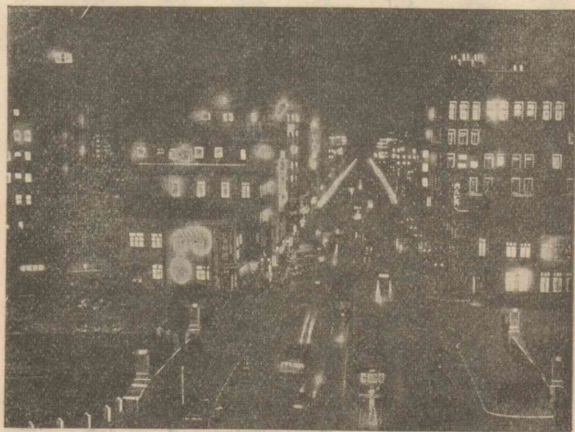
行燈



れに燈が添はなかつたら、唯一色の單調の畫、調味の出來てゐない料理の感じに過ぎぬであらう。燈火は夜の生命を活躍せしめる興奮劑ともいへよう。愛が人生に味をつける鹽であるといふなら、燈火は夜に味をつける鹽であることは疑ない。有明の燈といふ菜種の油の行燈のあかり、蠟燭のあかり、それらに趣はあるが、それは唯室内のあかりの趣に過ぎぬ。瓦斯のあかりも、何れかといへば同じく室内に適するものだといはなければなるまい。外で見るあかり、廣いところで見るあかり、遠くで見るあかり、それらは皆電燈の世界である。行暮れた山路で見つける一つ家の火影、船の上から眺める離島の燈火、それがもし石油のあか

りでもあつたらわれくには、夜が勝ちすぎて、寂しさが
 餘り強くこたへるであらう。さういふ薄暗いあかりはよ
 くよく特殊の場合に限られるこ
 とになつてゐて宜しい。さうい
 ふ舊時のあかりは、われくにと
 つては、珍しいものとして、いはば
 一種の贅澤として趣がある譯で
 ある。それが常住のものとなつ
 ては、趣はまるで消えてしまふで
 あらう。

東京の銀座、人形町通、京都の新京極、大阪の心齋橋通などい



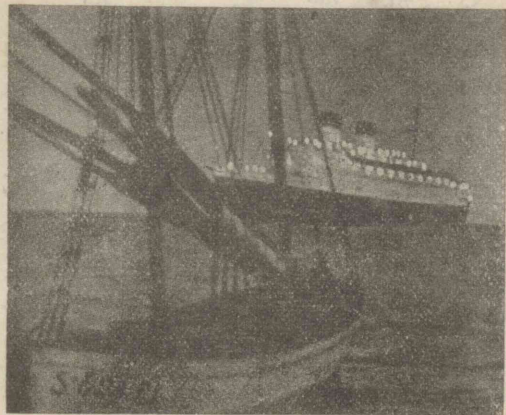
夜の銀座通

銀座
 東京市の盛場
 京橋區の大通
 人形町
 東京市日本橋區
 の盛場
 新京極
 京都市左京區の
 盛場
 三條以南四條以
 北寺町と高瀬川
 との間
 心齋橋通
 大阪市の盛場
 南區の大通

ふやうな賑かな商店街などに至つては、店内の照明も街燈
 も、電燈なればこそ、あのやうに明るく、あのやうに華やかな
 夜が現出せられ得るのだと思ふ。電燈の光には暖みがあ
 る、艶つぼさがある。瓦斯の光は何となくつめたい感じが
 する。

船全體を照明した汽船の駛るのをわが船以外に見るのは、
 海上の旅客の興であるが、これも電燈の恩澤である。闇の
 なかを動いて行く他の船の青い檣燈のみが見えるのも、趣
 ある眺には相違ないが、あかくと満船を照明した船の通
 るのは、確に海の單調を破る人間力のあらはれで、快感の胸
 に湧上るを禁じ得ない。

船ではもとよりのこと、汽車の中でさへ、大きい町のあかりへと近づいて行く時の心持が實にいゝものであることは、誰しもの経験に在るところであらう。さういふ一つの燈の焰とも見える燈火の一簇は、夜の旅の單調を破る色彩であり、いはば、一種の色調であつて、又長き旅程の一劃を我々の心に刻みつける里程標である。「あゝ、これからもう幾つめだ。」「これから何軒だ。」「これから、あと何時間だ。」「さういふ慰藉が、それらの燈影によつて、疲れた旅客の心に與



船汽の明照船滿

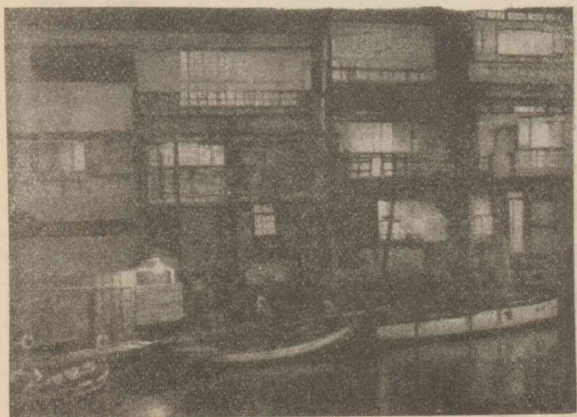
へられる。もしまたその燈火の大きな一簇がわれゝの旅路の到着點を示すものであつたならば、それは晝の場合よりも何層倍か我々の胸に安堵の思を湧かせることであらう。さういふ場合の町のあかりは明るいほど宜しい、華やかなほど宜しい、暖げに見えるほど宜しい。幸なるかな、現代の我々は電燈を有する。

水際の燈影、廣々とした磧のなかにたつた一つ建つて居る渡し小屋の燈火、眞暗の中を流るゝ野川のへりの水車小屋のあかり、ともしびあかゝらぬ小さい漁港のかゝり舟の青い舷燈、さういふあかりに様々の趣のあることは言ふまで

大川端
東京市を貫流す
る隅田川の沿岸

大江橋
大阪市北區
堂島川に架設し
てある橋

もないが、都會の川べりの燈影から受ける和かみと艶やか
 さとは、深く我々の心を捉へる。東京の大川端を歩いたこ
 とは餘りないけれども、あすこは
 川沿が大抵倉庫か何かになつて
 居るので、水に映ずる燈影の趣を
 見ることでできる場所が少いの
 ではなからうかと思ふ。大阪の
 大江橋の北岸、橋から西へかけて
 は、家が皆川に沿つて、欄干が水の
 上へさし出てゐるくらゐに建ち
 ならんで居る。南岸寄りの橋上から見るあのあかりのこ



大江橋上から見た燈火

とに春の夕の心持は實に快い。まだ全くは暮れきらぬ薄
 靄のかゝつたやうな空氣のなかに、曇を帯びたやうな燈火
 の一列の光の和かみと暖みとは、如何にも春の夕だといふ
 心地を観る者の胸に湧かさずには置かない。いや、それば
 かりではなく、川から立つ僅かの涼味を頼りに、橋上に立つ
 て黒い水の面に向ふ夏の夜に、一脈の涼しさを我々の胸に
 送るものは、あのあたりの家々の水に揺れる燈影である。
 初秋の宵の燈影では、或年奈良から宇治へ廻つて、夕暮に宇
 治を去る時、折柄の燈火のともつてから間もない宇治の町
 の美しい眺を汽車の窓から見返つた時の快さを、今も忘れ
 得ない。(野客漫言)

宇治
京都府久世郡宇
治町

瀧澤馬琴

江戸後期の小説家

江戸の人

嘉永元年(二五八)

卒

年八十二

贈從四位

蒲生修靜

名は秀實

字は君平

通稱は伊三郎

勤王家

下野宇都宮の人

文化十年(二四三)

卒

年四十六

贈正四位

小澤蘆庵

名は玄仲

歌人

尾張に生れ京都

の太秦に住んだ

享和元年(二四二)

歿

年七十九

東野

東國なる下野の

九 蒲の花がたみ

瀧澤馬琴

蒲生修靜、山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時小澤蘆庵は古學を好み、萬葉風の詠歌に名高く、世をすねたる隱逸なりと、豫て傳へ聞きしかば、彼が助を借らばやとて、その京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。小澤が家僕出迎へて、「いづこより」と問ふ。言寄る由もなきまゝに、修靜まづ伴りて、某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼ぶる者なり。琴を好み候へども、田舎には良き師なし。主人の翁は琴の妙手にておはする由、東野の果までも隠れなし。これにより御弟子に

ならまくほりして、はるくと來つるにて候といふ。

その僕心を得て奥に赴き、云々と告げにけん、蘆庵の聲と覺しくて、いと高く、あな無益にも訪はるゝものかな。汝出で

てしか答へよ、主人は久しう客を辭

して交を絶ちたれば、都の中にだに

親しうものせるは稀なり。琴は若

かりし時かき鳴らしたりけれど、あ

ちこちの人に知られて、彼に聞かせ

よ、此に教へよといはるゝがうるさければ、近頃打擡きて薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず。他に行きて求めたまへ。といへ。といふ聲の、襖一重を隔ててぞ聞え



蒲生 修靜 筆

ける。

修静、僕が云々といふをも待たず、更におし返して言ふ、翁の御答はこゝにてつばらに漏聞きたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しかじかの志願あれば、しばく江戸に遊學し、こたび都に上りしかど、相識れる者絶えて無し。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、琴を學ばんために來りつ。とは言ひしなり。こは長者を欺くに似たれども、その虚言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許して對面せられなば、肝膽を吐き志願を告げて翁の助を借らんと欲す。かくても意にか

なはずば、退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへ。といふ。蘆庵これを漏聞きて、さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずばくやしきことあらん。



小 澤 蘆 庵

此方へと申せ。とて、やがて面をあはせけり。

修静深く歡びて、夙くより思ひ起せる志願の由を説きしめし、山陵志著述のために古き御陵を尋ねんとて旅寢をしつることの趣云々と語り出でつるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得難き學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留め

て、こゝらわたりの御陵をしづかに訪求したまへ。とて、又他事もなくもてなしけり。

これによりて修静は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせければ、修静「老人の心づかひ心苦し」とて辭めども、従はず。「これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦かかる奇人に宿することの歡ばしく、且は足下の疲勞を慰めて、國のために力を盡くす人の助にならんとてなり。必ずいなみ給ふな」とて、後々までもしかしてけり。

かゝりし程に、修静ある夜更闌けて、子二つの頃歸りしかども、蘆庵は寝ねず待ちて居り。例の如く湯あみせさせ、飯をすゝめて、さていふやう「吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕を休らせんとて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草食うてか。老人に物を思はせ給ふこと心得難し」とつぶやきけり。

修静聞きて容を改め「翁の恨理なり。吾が非を飾るにあらねども、更闌けたるは聊か故あり。懺悔の爲に笑に供へん。今日はそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。ここに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて罵るやう、梟臣尊氏、なほ靈あらば、今言ふことを確に聞け。

等持院
京都市上京區衣
笠町にある臨濟
宗の寺
足利氏の菩提寺
足利義隆創立

汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆守りて毒を後世に流ししより五百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もこれが爲に燒亡び、王室もまたこれに困りて卑しく、世々の山陵すら迹なくなりて、吾等にさへかくまで物を思はするはみな悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし。とて、杖もてあたりの石を思のまゝに打毆きつ。かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡くしたり。さて、酒屋を出でしかど、酔うて足も定まらず。このまゝにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思ひて、株に尻をかけしより、熟睡やしけん、時移りて驚き覺むれば、

更闌けたり」と語る。

蘆庵ふきいだして、からくとうちわらひ、さてもく、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。吾等亦往ぬる年ある日、靈山の邊に逍遙して長嘯子の墓をよぎりし時、さすがに宿恨なきにあらねば、行きもえやらす、にらまへて、長嘯子、不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは豊太閤の外族とて、位高く、且采地も廣かるに、心ざま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠を捨殺にせしは不義なり。事平ぎて罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸にして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人がほして、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調

靈山

京都市東山區圓山公園の奥の山四條の末に當る

長嘯子

木下勝俊
豊臣秀吉の夫人
北政所の兄木下
家定の長子
歌人

慶安三年(1710)

卒

年八十一

鳥居元忠

徳川家康の家臣
慶長五年(1600)
伏見城で戦死し
た

年六十二

谷口尙眞

海軍大將

前軍事參議官

明治三年(一五〇)

廣島縣生

英國皇帝戴冠式

當時東郷元帥の

副官として隨行

した

英國皇帝戴冠

式

西紀一九一一年

(明治四十四年)

英國ウエストミ

ンスター寺院で

行はれた英國皇

帝ジョージ五世

陛下の御即位式

わろくなりて、今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん。」と罵りながら、杖をあげて墓のあたりを殴きたることありけり。こは能く似たるに「あらずや」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹をかゝへたりとぞ。(兎園小説)

一〇 我等の東郷元帥

谷口尙眞

英國皇帝戴冠式の當時、ロンドンには世界各国よりいはゆる衣冠雲の如く集るといふ有様であつたが、中には陸軍海軍ともその名の高い將軍も少くなかつた。しかしながらわが東郷乃木兩將軍の存在は確に最も多く世界の注意を

喚起した。

英國皇帝陛下におかせられても兩大將に對しては特に御目を留めさせられたやうに拜察した。 Buckingham Palace の大園遊會に於けるが如き、ジョージ五世陛下は特に兩大將を御前に召出して優渥なる御言葉を賜ひ、兩大將をして感激せしめられた。

英國人は東郷元帥がその青年時代に英國に於て教育を受けられたことを熟知してゐるので、元帥に對しては殆ど自國人を見るが如き親しみを有し、元帥の如き偉大なる人物を出したことを以て英國の誇とさへ思つてゐた。されば元帥が折々ハイドパークを散歩せられることがあると一

Buckingham Palace

George V

(1865—1936)

英國皇帝
エドワー
ド七世の
第二皇子

ジョージ五世陛下

Hyde Park
ハイドパーク
ロンドン市
の一公園

アドミラル
海軍大將

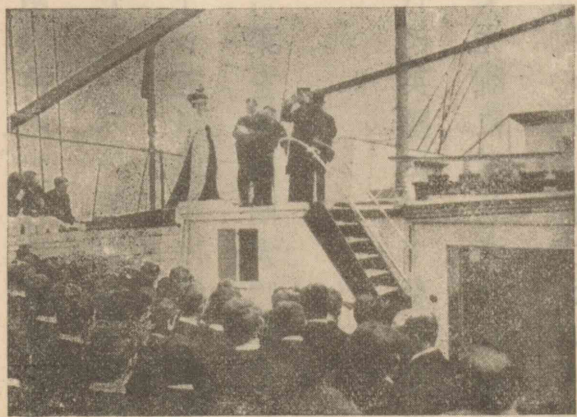
スピーチ
演説したま
へ
ウスター
テムズ河
Worcester
ロンドン市
Thames
を貫流する
川

キャプテン
Smith
ス

ウスター協會
ウスター航海練
習學校の同窓生
より成る會

—元帥はハイドパークホテルに止宿して居られた——何
處からとなく「アドミラル東郷、アドミラル東郷」といふ小さ
なさゝやきが起つて、それからそ
れへと傳はるのを例とした。そ
れのみならず、時として元帥が自
動車で群衆の中を過ぎられると、
群衆は元帥の車を包圍して「スピ
ーチ、スピーチ」と歡呼して車を停
めたことさへあつた。

元帥が英國留學中入學してゐら
れたウスター航海練習學校はテムズ河畔にある。元帥



ウスターの上艦—東郷元帥

在學中の校長はキャプテン、スミスといふ人であつたが、既
に久しき以前に故人となられた。元帥はスミス大佐に對
して深く恩誼を感じて居られ、私どもにもむかつて、しばし
同大佐の追憶談をなされたこともあつた。當時大佐未亡
人は尙健在であつたので、着英後間もなく、元帥は先づ恩師
の墓に參詣せられた上、未亡人を訪うて、心を籠めた贈物を
なされた。又一日母校を訪問して、生徒に一場の訓示を與
へられたこともあつた。

ウスター協會の晚餐會は、英京滞在中招待された主な行事
の一であつた。その席上に於て、元帥は始めて英語演説を
試み、多大の喝采を博せられた。その全文は翌朝の新聞紙

| | | | | |
|---|--------------------|--|--|-------|
| Sir Ernest Henry Shackleton (1874—1922) 南極探 検家 | シヤックルトン Mckenna | マケンナ Frederick Sleigh Roberts (1832—1914) 英國の 勇將 | ロバートツ Horatio Herbert Kitchener (1850—1916) 英國の 勇將 | キツチナー |
|---|--------------------|--|--|-------|

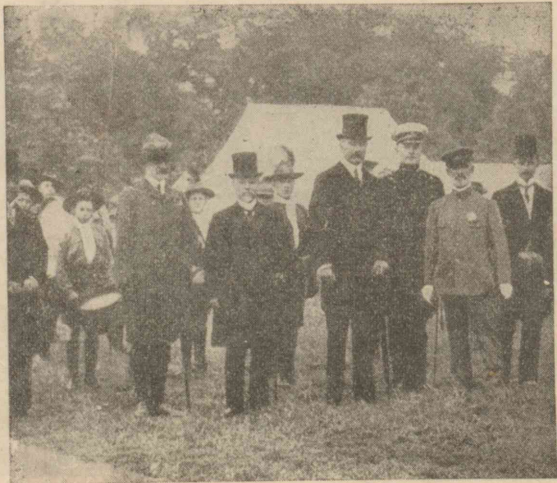
に掲載せられ、大いに世人の注意を喚起した。その日の午
 餐にキツチナー元帥、ロバートツ元帥、マケンナ海相並に南極
 探検家として當時名聲噴々たりしシヤックルトン氏等と
 會食せられたが、前夜の演説の噂に花が咲き、キツチナー元
 帥は、

お氣をおつけにならんと御評判にかゝはりますよ。

と冗談を言はれたことを記憶してゐる。けだし東郷元帥
 が沈黙將軍であることは英國に於ても評判が高く、而して
 キツチナー元帥もまた演説嫌な無口な將軍であつたこと
 は著名の事實であつた。元帥はその後スコットランドの
 湖水地方を自動車で旅行せられ、明媚なる風光を觀賞せら

スコットランド
 英國の一地
 方
 グレートブリテン島の
 北西部
 Scotland

れたが、到るところで一般の民衆に発見せられ、時としては
 周圍につどひ来る群衆のために交通がとまるほどのこと
 さへあつた。その場合、同伴
 のダンダス將軍が徐に「アド
 ミラル東郷を通して下さい。」
 といふと、一條の通路がおの
 づから開けるといふ有様で
 あつた。



キツチナー元帥と東郷乃木兩大將

歸途米國の旅行もなかく、
 御多忙なものであつた。米國政府は議會の決議をもつて
 特に東郷大將接待費の支出を可決し、國務次官ヘール氏、海

ルーズベルト
Theodore Roosevelt
(1859—1919)
オイスターベイ
Oyster Bay
サガモアヒル
Sagamore Hill
ニューヨークの東百軒

軍省諜報局長ポッツ大佐を接伴員として隨行せしめた。各地における夥しき行事中において最も感興の深かつたのはルーズベルト前大統領をそのオイスターベイの閑居に訪はれたことであつた。ルーズベルト氏は元帥がサガモアヒルの邸に着せられるや、倉皇として出迎へられた。その固き握手の中に發せられた第一の歡迎の辭は、わがサガモアヒルは過去において大將の如き偉大なる人を迎へたることなく、又將來とてもこれなかるべしとの語であつた。

米國に於ても英國におけるが如く、元帥は到るところ群衆

の歡呼喝采を受けられた。或時の如きは、ホテルの食堂において、面識なき一紳士が突然立上つて元帥の功業を讚美する演説を始め、やがて元帥のために杯を擧ぐるや、滿堂の紳士淑女が一齊に起つて乾杯をするといふやうなこともあつた。かゝる場合でも、元帥は泰然自若として微笑を含んでゐられる。ひとりあわを食ふのは私であつた。元帥は如何なる場合、如何なる場所に於ても到底御微行の出來な

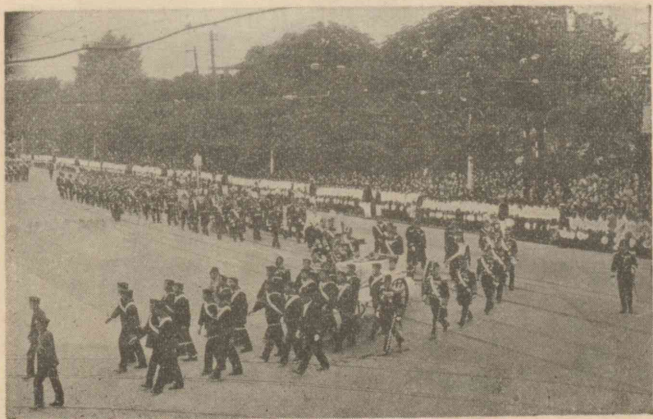


米國に於ける東郷元帥

い人だと私は思つた。かくのごとく、米人は一般に元帥に對して恰も自國の凱旋將軍を迎へるがごとき歓迎ぶりであつた。彼等は、

獨り日本の東郷であるのみならず、同時にまた我等の東郷である。

と申してをつた。今や偉大なる元帥は逝いてまた還らず。思ふに英國や米國の人々もまたわが國人と同じやうに「我等の東郷元帥遂に逝けり」と叫んで、哀



東郷元帥國葬

今や
昭和九年五月三十日午前七時

悼の情に満たされてゐることであらう。(東京朝日新聞)

軍艦淺間より

明治三十八年六月十八日筆者が淺間艦長時代當時の大本營參謀海軍中佐小笠原長生に寄せたもの

八代六郎

海軍大將
樞密顧問官
男爵
尾張國(愛知縣)生
昭和五年薨
年七十

二 軍艦淺間より

八代六郎

十六日附貴翰拜受、御厚情感謝し奉り候。此度の海戦の勝利は、恐ながら陛下の社稷を重んぜさせ給ふ大御心と國民の國家を思ふ熱誠とが一般海軍軍人の心根に徹し、上下一心、内外相應じ、全軍協力、各部遺憾なく活動致したる結果に外ならず候。

淺間は戦闘將に酣ならんとする時に舵機に故障を起して列外となり、敵八艦の集彈を受け、苦戦に陥り、その後浸水を來し、速力低下し、大いに心痛致し候ひしも、艦

員必死の盡力にて幸に應急の修理相整ひ、先は戰場を去るに至らず、敵の二戦艦に大害を加へ、火災を起さしめ、日本男兒の一分を辱しめずして事済み候。是小生の心私に喜ぶところに御座候。さりながら、少くとも敵の二戦艦を撃沈せんとの會戦前の覺悟を實現し得ず(奇襲隊列を解かれしたため)誠に残念に御座候。

新聞に「淺間の戦狀壯烈を極め云々」とこれあり候が、あれは淺間が八艦の集彈を受け候當時、他艦艇よりその物凄き狀況を望見して報道したるものと存じ候。さりながら、戦場の功は敵に害を與へたる多少によりて論ずべきものにて、單に奮戦力闘したりとて格別に賞

すべきことにはこれ無く、淺間の平素訓練の度より申せば、聊か物足らぬ心地致候。敵に大分の損害を與へ、艦尾浸水の爲五呎程沈下したるも尙戰場を去らざりしは、小生の決心と艦員の沈勇とに因るものにて、さまざまで恥づかしくは感じ申さず、唯最後の一戦に敵の一艦をも沈め得ざりしは返すも無念に御座候。小生當分出京は遠慮致し居り候。今回は必死を期したるに、薄手だに負はず、幸か不幸か分別に及ばず候。出京、戦死者の遺族に面することは苦戦の苦よりも一層甚だしく、この點に於ては小生は大の臆病者に候。されども一度は出京も致さざるを得ざることと相成

るべく、その節は拜眉の上御厚情を謝し、戦況など申しあぐべく候。先は御返事旁、御禮迄此の如くに御座候。敬具。(偉人天才を語る)

三 羽州の鬼

橋 南 谿

出羽の國小佐川さかといふ處に至らんとする頃は、はや申の刻も過ぎつらんと覺えて、山の色もいと暗く、殊に昨日よりしめやかに雨降りて、日影も定かに知れず。先の宿まではまた三里もあれば、とても日の中には到り難からん。されど雨中なれば、思の外に、いまだ時刻の移らぬことにもやなど疑ひて、行逢ひたる老夫に、先の宿まで行くに日は暮るまじ

羽州

出羽の國

羽前・羽後の兩國に分たれた

今の山形・秋田

兩縣

橋南谿

本名宮川春暉

醫家・國學者

伊勢(三重縣)の

人

京都に出て醫を

業とし兼ねて文

筆に親しんでゐ

た

文化二年(西六五)

年五十三

小佐川

秋田縣由利郡上

濱村大字小砂川

養軒
南谿の門人
日向(宮崎縣)の
人

や」と問ふに、眉を擡め、道をだに急ぎ給はば、行着きもしたまはんなれど、見れば遠國の人々にこそ。この程はこのあたりに鬼出でて人を取り食ふ。初は夜ばかりなりしが、近き頃になりては、白晝に出でて、この道行きかふ者をば人馬の差別なく食ふにこそ。これまでの道も鬼の出でぬる處なるに、食はれ給はざりしは、運強き人々なり。これより先は殊更鬼多し。旅するも命のありてこそ。何急ぎの用かは知らねども、日暮に及んで行き給はんは危し」といふ。養軒聞くより笑ひつゝ、「いかに邊土に來ぬればとて、人驚かすも程こそあらめ、鬼の人を取り食ふなどは昔嘶の草雙紙などにあることにて、三歳の小兒も今の世には信ぜざるこ

となり。その鬼は青鬼か、赤鬼か。虎の皮の犢鼻褌は古しや新しや。など嘲り戯れつゝしばし行く程に、尙時刻の覺束なければ、あやしの藁屋に入りて、日ある内に向ふの宿まで行着くべしや」と問ふ。このあるじも驚きたる體にて、旅の人は不敵の事を宣ふものかな。この先はかばかり鬼多きを如何にして無事に行過ぎたまはんや。昨日もこの里の八太郎食はれたり。今日も隣村の九郎助取られたり。あな恐し」といひて、時刻のことは答へもせず。



橋南繪

「同じ様にも人を驚かすものかな」と笑ひて出でつゝ、他の人に問ふに、又鬼のこといふ。怪しくも猶をかしけれど、三人まで同じ様に恐れぬるに、何とやらんまことしやかにもなりて、養軒何とか思へる。詞も怪し、殊に日足もたけぬと見ゆ。雨猶そぼ降りてけしきも心細し。さのみ行先急ぐべきにもあらず。人里に遠ざかりなばせん方もあるまじ。猶委しく尋ね問ひて、鬼の事言はば、今夜はこの里に宿りなん」といへば、養軒も同意しつ。それより家毎に入りて尋ね問ふに、口々に鬼の事言ひて、舌を震はせて恐る。「さてはそらごとにあらじ。故郷を出でて三百里に及べば、かゝる奇異の事にも遇ふことぞ。さらば宿り求めんとあなたこな

た宿を乞ひてやうく六十に餘れる老婆と二十四五ばかりなる男との住める家に宿りぬ。足濯ぎて、圍爐裏によりて木賃の飯をたくくも又かの鬼の事尋ねれば、老婆恐れ戦きて、何事かかきつくやうにいふ。邊土の女、その言葉一入に聞取り難くて、何事をいふとも知れず。「さらばその鬼はいかなる形ぞ。額に角を見て、腰に虎の皮の犢鼻褌せりや」といへば、男かぶりをふりて、「左様のものには非ず」といふ。「然らばいかなるものぞ」といへば、「唯犬の如くにして少し大いなり」といふ。「せい高く、口大いなりや」と問へば、「その如し」といふ。「さては狼にては非ずや」といふに、「狼ともいふと聞きし」と答ふ。養軒顔を見合はせ、さ

狼



ては大方ならぬ恐なり」といふにぞ、先程よりの言葉ども俄に眞になりし心地して、恐しきこと言ふばかりなし。

なほ委しく聞くに、この小佐川の人も六七人も食殺されぬ。昨日もこの向ふの有耶無耶の關の者に飛懸りしに、かの者勇力の男にして、ひしと組付き、一身の力を出して遂に狼を組伏せたりしに、身に寸鐵も無ければ、組伏せは伏せながら、如何ともし難し。やうくに傍の石を拾ひ、その石を以て狼の頭を敲き碎きて殺しぬ。されどその身も數箇所手負ひて、家に歸りて死せり。など、この間の事ども恐しきかぎり取集めて言ふにぞ、これは狼に病附きて、白晝にも數十匹出でて人を害するならん。我々、この邊境に來りて禽獸の爲

有耶無耶の關
秋田縣由利郡上
濱村大字關
小砂川の北

に命を失はんこと、如何ばかり口惜しきことならん」と思ひ
 回らせば、その夜は目もあはず。「これより歸らんも危し、行
 かんことも猶更なり。この里に住みはつべき身にもあら
 ず。盗人ならば衣服をも與ふべし、敵あたいならば智略をも施す
 べし。如何にせん、異類の獸の爲に勇を振はんこと誠に虎
 を手打にするの類にして、志ある者のすべきことにはあら
 ず。されど、さしあたりたることにせんかたもなく、殊に明
 日のみに限らず、行先は連山波濤の如く見ゆれば、あの中を
 越えゆかんに、如何なるこの上の猛獸か出でん」と、あらぬ思
 を費して、程なく夜は明けぬ。
 なかく、に打立つべくもあらねば、件の男を呼びて、「この里

虎を手打に
子曰ク、暴虎馮
 河死シテ悔ナキ
 者ハ、吾ハ與セ
 ザルナリ。(論
 語、述而篇)

に馬あらば、二匹借りて與へよ。賃錢は厭はじ」とひたすら
 に頼みしに、「駄賃馬はこのあたりにはなし。などとしぶと
 にいひつゝ、出でゆきしが、程なく歸りて、馬二匹しかとの
 賃にて先の宿まで借來れり。その上この近隣に秋田へ越
 ゆる商人兩人宿りゐて、鬼に恐れ、これも馬二匹を借りゐた
 りしが、そこたちのことを言ひたれば、「よき道連なり、同道し
 て給はらんや」と、某に頼めり」といふ。「さてはよき味方を得
 たり。此方よりこそ頼みたきものを」といひつ。
 それよりかの商人と申し合はせ、かの兩人にこなた兩人、馬
 四匹に馬子四人、手ごとに長き棒を携へ、鹿狩などに出づ
 るやうにいでたちて、小唄歌ひ連れ、大勢の勢にさゝめき出

エヂソン
Thomas Edison (1847-1931)
米國の名
高い發明家

でたれば、少しは安堵して、昨夜思ひ煩ひし程にもあらず。されど若しや出できたらんかと、四方に眼をくばり行過ぎしに、運よく無難に向ふの宿に着きたり。關越ゆるあたりにては、かの昨日石にて敲き碎きし狼の顎ばかり落残れり。その體は何方へ取去りしや見えぬ。見るだに恐しきことなりき。誠にこの道筋三里が程には人家もなく、高き芝原にて、細き道筋數々つけり。病なくとも狼の出づべき土地とぞ覺ゆる。猶その先の宿々もかの商人と一組になり、皆馬に打乗りて用心堅固にして行きしに、五六里が程過ぎしかば、鬼の沙汰もやみぬ。誠に人を食ふものゆゑに、このあたりにては狼を鬼といふなるべし。古風なることなり。

中原岩三郎
電氣工學者
工學博士
明治元年(五三)
長門國(山口縣)
生

Washington
北米合衆國
の首府

武藤山治

實業家
衆議院議員
美濃國(岐阜縣)
生

昭和九年卒
年六十八

ウエスト、オレ
ンデ

West Orange
ニューヨー
クの西二十
軒

オフィス

事務室

Bell Office
ベル

程過ぎて今に至ればをかしき物語となりぬれど、その時の物案じ筆の及ぶ所にあらず。(東西遊記)

一三 發明王エヂソン

中原岩三郎

大正八年の秋、ワシントンに開かれた第一回國際労働會議に、資本家代表武藤山治氏の顧問として列席した私は、その年の十二月、ウエスト、オレンドにあるトーマス、エヂソン翁の研究所を訪れた。發明王エヂソン、人類の恩人エヂソン——エヂソン翁こそ、電氣研究者としての私が、一生に一度でもよいから會つてみたいと思つてゐた人だつた。研究所のオフィスのベルをぐつと押すと、若い書記らしい男が

出て来た。

「御用は？」

「エヂソンさんにお目にかゝる御約束で……」

訪問者の署名帳を繰つてみると、學者政治家實業家など、世界のあらゆる方面の有名無名の人の名が、よくもかうまで集つて来たものだと思はれるほどずらりと肩を並べてゐる。

「はあ、御面會ですか、先生は今晝寢の最中ですよ。え、この奥に寝てゐられるんです。もうすぐお目ざめでせうから、それまで暫く研究所の方を御案内致しませう。」

エヂソン翁の生命は研究だ。翁は研究の世界の外には、殆

ど一歩も踏みださない。そして發明は翁の生命の糧だ。

夜でも晝でも研究に没頭してゐる翁は、疲れてくると、オフ



イスに備へつけられたベ
ッドの上に、無雜作にごろ
ヂりと横になつてしまふ。
ソ 夢幻の間にふと湧起るイ
ンスピレーション——そ
れが或はエヂソン翁の偉

大なる發明のヒントになつたことがあるかも知れない。

それとも、翁はたゞ精力の泉を、しばしの睡眠に求めるだけだらうか。

ベッド
寢床

インスピレーシ
ン
靈感
Inspiration

ヒント(てがかり)
暗示
諷示
Hint

Motor
モーター
發動機

「さあ、どうぞこちらへ。」

研究所といつても、案内されたところはまるで大工場だ。モーターのうなり、機械の目まぐるしい動きのうちに、三十人もの翁の助手と大勢の職工とが、油にまみれて働いてゐる。研究所をぐるりと一巡りして元のオフィスに歸つてくると、腕時計は一時間たつぷり旋つてゐた。エヂソン翁はやつと目を覺して私を迎へてくれた。七十四五歳だつたらう。四角な平べつたい顔で、灰色の瞳が鋭い。だが、見たところ、平和な物靜かなお爺さんだ。質素な黒つばい背廣服が一層翁の人柄をゆかしく見せる。「どういふ御用ですか。」

翁の言葉ははつきりしてゐる。

藤岡市助
電氣工學者
帝國大學工科大
學教授
周防國(山口縣)
生
大正七年卒
年六十二

「私は藤岡市助博士に引立てられて、今まで東京電燈會社に技師長をして居りました。國際労働會議にやつて來たのですが、今日は専門の電氣の見學に參りました。」

といふと、翁は「藤岡さんなら私も知つてゐる」と、一しきり藤岡博士のうはさ話——翁は老體とも思へぬほど達者だが、耳が遠い——私は翁の耳もとに口をよせて、大きな聲で話した。その日の翁はなかくの上機嫌と見え、労働會議のことが話題にのぼると、

「さうです。資本家も労働者も最後の目的は同じで、結局は利害の一致するものです。資本家と労働者とが、互に

Steinmetz
(1865—1923)
電氣學者
獨逸生
米國ユニオ
ン大學教授

反目し互に争つてゐたのでは、すべての事業の進歩も發達も到底望まれません。翁は勞資協調論を強調して、煙草をすばくとうまさうに吸つた。翁に會ふ前、私は有名な電氣學者スタインメッツ博士にも會つたが、スタインメッツ博士と翁とはまるで感じが違ふ。スタインメッツ博士は純然たる學究といふ感じでしたが、エヂソン翁は決して學者肌の人ではないと思つた。翁は理論家ではない、實驗の方からこつくとたきあげて來た人だといふ感じが強い。晝も夜も殆ど一瞬もたゆみない研究、書物の上からばかり割りだすのではなくて、實驗の上に實驗を積重ねて、翁の驚くべき大發明は完

成されるのであらう。電燈、活動寫眞、蓄音機、その他數へきれぬほどの發明は、恐らくみんな、翁の天才的頭腦と尊敬すべき努力の「手」とから、かうして生れ出たのであらう。

「今、何を御研究ですか。」

といふと、

「蓄電池の研究をやつて居ります。」

と答へた。

これは翁の助手から聞いた話だが、翁は研究に没頭しはじめると、時間も食事も何もかも打忘れてしまふ。翁の全精力は今のはたゞ研究の一點にのみ傾注されて、翁の頭腦は神の如く働き出す。翁はもう完全に「發明の世界」に融けこん

サイレン
號笛
Siren

で、この一箇の小さい人間は、こつくと限りない宇宙の神祕の謎を綿密な科學の力で解きほぐさうとする。こゝに、發明界の巨人大エヂソン翁の姿が、躍如としてあらはれる——正午のサイレンが高らかに鳴響く。しかし、翁はパンも水も忘れきつて、たゞ無意識に机の引出から煙草を取出しつゝ、傍からはやけに見えるやうに吸ふ。研究所の近くのお宅から奥さんが迎ひにくる。

「御飯でございますよ。」

翁はやつと我にかへる。夕方になる。黄昏のとぼりが窓を包んで、電燈がばつと一時に輝く。翁はそれも知らない。また奥さんが迎ひにやつてくる。

「あなた、御飯でございますよ。」

奥さんの聲に、翁の魂は又俗界に呼戻される。時間の觀念を超越した翁は、社會の人々がみんな寢靜まる頃になつてもまだ研究をやめない。例によつて奥さんが呼びにくる。

「あなた、あなた、もうおやすみなさいませ。」

エヂソン翁はやうやく家庭の人となる。これが翁の三百六十五日だ。私はこの偉大なる發明家の幾十年といふ撓まぬ努力に、おのづと感謝の念が湧いて、頭を垂れた。

「では御機嫌よう。」

握手を交して門を出て、振返つて見ると、もうエヂソン翁の影はなかつた。その時、ふと私は翁の逸話を思ひ出した。

ハンドル
Handle
把手

翁は蓄音機を發明した時、早速これを抱へこんで、ある雑誌社の編輯局にやつて來た。そして、どつかと机の上に機械を置いて、黙つてハンドルを回した。

「皆さん、これは蓄音機です。皆さんはこれがおすきですか。」

始めて聞いた機械の聲！一同はあつと驚いてしまつた——こんな話を思ひ浮べて、私は「エヂソン翁も案外いたづら者だはい」と微笑ましくなつた。さういへば、今會つたエヂソン翁の面影の中にも、そんな半面がちらと浮んでゐたやうな氣がした。（世界人の横顔）

野口昂

一等操縦士
明治三十六年
三月千葉縣生

ミルク
Milk

一四 空の感觸

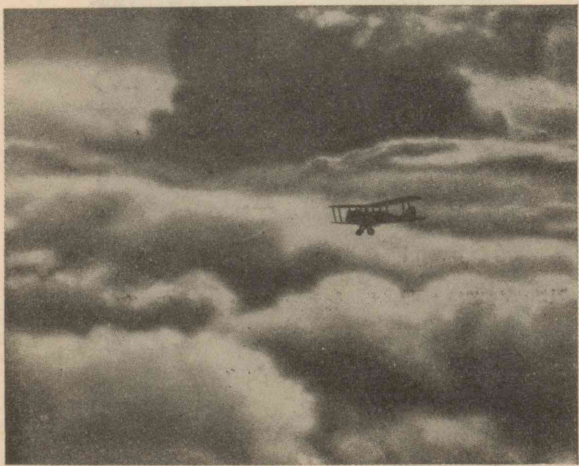
野口 昂

發動機を全速にして、機首を約二十五度位の上昇角度にする。機は空に向つて放たれた矢のやうに、張りつめた雲層の眞下に追つてゆく。暫くして、さつと雲の層に飛込む。

ひいやりとした感觸と共に、四邊はミルクの中を泳いでゐるやうな純白な世界となる。全く、咫尺を辨ぜぬのだ。この純白な、そして冷々とした世界に呼吸を続けながら、十秒、二十秒、まるで映寫幕に撮し出された映像のやうな操縦席の周圍を視つめてゐると、次第に、するどい恐怖が襲つてくる。

機は眞白い雲の中に在つて、たゞ、じつと一點に停止してゐるかのやうでもあるが、顔面に颯々と觸れて來る感觸は、機の進行しつゝあることを首肯させる。三十秒、五十秒、或は一分、この厚い雲層の突破も間近い。すると行手は次第にぼんやりとして、ほのかなる明るみが感じられる。太陽の光線が、しん／＼と雲の上層に融けこんでゐるからだ。純白な世界、これは人間に取つては非常な壓迫だ。人間が透明な世界を欲求してゐる本能が實際はつきり物語られてゐる。いよ／＼最後の瞬間に、ひよいと雲層を突破する。

そこは、ばつと打開けた光線の世界だ、そしてその展開された莊嚴な情景に對しては、全く驚異の眼を見はるのみである。光線のまぶしさを避けながら、不思議なものでも眺めるやうに、周圍を見渡すと、そこには上翼が雲上に在つて、下翼はまだミルクの波に沈んでゐるのだ。若しこの時機首を下げて、機を水平飛行の姿勢に置くならば、これは全く雲を泳ぐ態



機行飛の上雲

ある。恰も遠くの水平線を目がけて、颯々たる拔手を切つてゐるといふ感じだ。

しかしそれよりも、轟々たる爆音の雄叫を聴きながらこの雲海を泳ぐといふことは、正に科學文明の所産によるところの豪快さであり、且勝れたスポーツの一種であらねばならぬ。

そして、このスポーツこそは、操縦士のみ許された特権であり、或は飛行機に親しみ得る者にも與へられるところの快感である。

やがて一鞭する。それは、スロットルを開いて發動機を再び全速とすることだ。

スポーツ
競技

スロットル
發動機の節
氣瓣

Vincent Van Gogh
(1853-1890)
ゴッホ
オランダの畫家

そして上昇だ。すぼりと、下翼が雲海を蹴る。それは、新鮮な林檎にさくつと噛みついたやうな感覺であり、ミルク色のしづくが滴り落ちてゐるやうな、明朗な感覺だ。機は矢のやうに上昇する。見る／＼、豪壯な、廣濶な、純白と紫とに彩られた雲海が脚下に美しく展開する。空はいよ／＼深く廣く、そして空は獨樂の心棒のやうに澄みきつてくる。太陽はゴッホの「ひまわり」よりも強烈に、且鋭く輝いてゐる。爆音は全く澄む。



ひまわり
ゴッホ作

空と雲の海とにのみ浸透してゆくのであるから、少しも反響といふものがない。

ごうくくく、ごうくくくと、剃刀の刃のやうに鋭い音波となるのみだ。

脚下の雲海は高低起伏、さながら波濤であり、氷原であり、葱畑の葱の花の大坊主・小坊主である、まことに茫々漠々たるものである。

その盡きるところは即ち瑠璃の大空に連なつて、かつきりと白と青とのけぢめの一線を劃してゐる。複雑に慣れた人間の眼に取つて、これはまことに不思議な感じだ。この世界を、たゞ漠然と眺めてゐると、飛んでゐるといふことと、

生きてゐるといふこととの意識が、全くおぼろなものになつて来る。

そして若し、この漠然たる意識をむりやりに自分といふものに引戻して来ると、この世界に存在することが實にはかなく、か細く、また自分ながら可憐になつて来る。がしかし、その半面には、文明の凱歌といふことの現實に酔ふところの自己の姿も発見される。雲海を脚下に飛ぶ。實に快適の極だ。

細かい觀察の眼をさし向けると、そこには女神の裳のやうに神々しい、純粹なる薄紫の雲のかげりが眼に映る。もくもくと湧立つ大坊主・小坊主、或は高低起伏する波濤、何れも

神韻縹緲たる淡紫だ。

畫家の感覺の眼は、物體の描寫に際して紫の陰影を用ひるが、我々普通人の眼では、その感覺を得ることは不可能だつた。けれども雲を脚下に見る。この時こそ紫の陰影を發見する。これは實に美しく、實に神々しい。神の世界の示現もかくやと感ずるばかりである。

機首を轉じ、太陽を背に向ける。

すると飛びゆく或角度の前方には、ぼつかりと、わが機影が疾翔してゐる。しかも、その機影には、機影を包む眞圓い虹を發見する。全く驚異だ。これこそ驚異の見本のやうなものである。七彩絢爛たる眞圓い虹が、しかも機影を包ん

で疾翔する。

これは氣象學で、霧虹と稱するものである。

やがて再び大地の展開してゐる空に舞戻つて、全くほつと溜息を吐いた。そして、逃避し來つた層雲に、改めて首を傾けざるを得なかつた。

(二期)

一五 吾が家の富

徳富健次郎

徳富健次郎
號は蘆花
文學者
肥後國(熊本縣)
生
昭和二年
年六十

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰か言ふ、狭くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭きも碧空を仰ぐべく、歩いて永遠を思ふに足る。神の月日は此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風・雨・雪・霰かはるゝ、到りて興淺か

らず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩
また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は、殆ど三坪の庭に溢
るゝを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開
いて樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花
ちらく、と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。隣家に花樹多
し。風に從ひて飛花、吾が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見
るがうちに滿庭花の衣を着く。子細に見れば、桃の花あり、
櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭の隅に一株の山榭あり。五月閏鬱陶しき頃、芳しき白花
を開く。主も妻も無口なれば、この花の吾が家に開くは宜
なりけり。

老李の後に一株の碧梧あ
り。碧幹亭々として、些の
邪なく、吾が如く直かれと
教ふるに似たり。梧葉と
手水鉢の側なる金剛纂と



碧 梧
大 智 勝 觀 筆

は葉廣くして、吾が家の雨聲を多からしむ。李熟して、白粉
ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の
子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくくぼふしの聲に、世は何時しか秋に入りて、茶梅咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、唯一株前の家主の植残したる黄菊も咲出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ



茶梅
椿椿
山筆

閑寂の趣は却つて吾が庭の一枝にあるべし。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹黄金よりも美なり。風の風起れば、かぐや姫の扇にせまほしきその葉翻々

かぐや姫
竹取物語の中に出でくる美しい高い姫君

として飜り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ちそひて、寸金と人は言ふなる錦を吾は庭に敷きつめぬ。

木の葉落ちつくしては、さすがに寂しげなるも、日影月影いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに障り少きは嬉し。

(蘆花全集 自然と人生)

一六 浅草紙

吉村冬彦

ある日、空が珍しくよく晴れて、風のちつともない午前、私は病床から這出して、縁側で日向ぼっこをしてゐた。都會

浅草紙

すきがへし紙の一種
反古紙やぼろなどを水にひたして搗き碎き粘土をまぜてすきあげる

吉村冬彦

本名は寺田寅彦
物理學者
理學博士
東京帝國大學教授
帝國學士院會員
昭和十年薨
年五十八

ではめつたに見られぬ強烈な日光のぢかに顔に照りつけるのが少し痛い程であつた。それに乾してある蒲團からは、ぽか／＼と暖い陽炎が立つてゐるやうであつた。濕つた庭の土からは、微かに白い霧が立つて、それが僅かな氣まぐれな風のそよぎにあふられて、小さな渦を卷いたりしてゐた。子供等は皆學校へ行つてゐるし、他の家族も何處で何をしてゐるのか、少しの音もしなかつた。實に靜かな穩かな朝であつた。

私は無我無心でぼんやりしてゐた。たゞ身體中の毛穴から暖い日光を吸込んで、それが、このしなびた肉體の中に滲みこんで行くやうな心持をかすかに自覺してゐるだけであつた。

ふと氣がついて見ると、私のすぐ眼の前の縁側の端に一枚の浅草紙が落ちてゐる。それはまだ新しい、ちつとも汚れてゐないものであつた。私は殆ど無意識にそれを取上げて見てゐる内に、その紙の上に現れてゐる色々の斑點が眼につき出した。

紙の色は鈍い鼠色で、丁度子供等の手工に使ふ粘土のやうな色をしてゐる。片側は滑らかであるが、裏側は随分ざらざらして、荒筵のやうな縞目が目立つて見える。しかし日光に透かして見てゐると、これとは又獨立なもつと細かく規則正しい縞のやうな縞目が見える。この縞は多分紙を

漉く時に纖維を沈着させるために用ひた簾の痕跡であらうが、裏側の荒い縞は何だか分らなかつた。

指頭大の穴が三つばかりあいて、その周囲から喰みだした纖維が、その穴を塞がうとして手をのばしてゐた。

そんなことはどうでもいゝが、私の眼についたのは、この灰色の四百平方糎ばかりの面積の上に、不規則に散在してゐるさまざまの斑點であつた。

先づ一番に氣の附いたのは赤や青や紫などの美しい色彩を帯びた斑點である。大きいのでせいゝ一糎四方、小さいのは蟲眼鏡でも見なければならぬやうな色紙のきれが漉込まれてゐるのである。それが唯一様な色紙では

マッチ
Paper
ペーパー

なくて、よく見ると、その上には色々の規則正しい模様や縞や點線が現れてゐる。よく見ると、その中の或物は狀袋のたばを束ねてある帶紙らしかつた。又或物は巻煙草の「朝日」の包紙の一片らしかつた。マッチのペーパー、廣告のちらし紙や、女の子のおもちやにするおすべ紙や、あらゆるさういふ色刷のどれかを想ひ出させるやうな片片が見出されて來た。微細な斷片が想像の力で補充されて、頭の中には色々な大きな色彩の模様が現れて來た。普通の白地に黒インキで印刷した文字もあつた。大概やつと一字、せいゝで二字位しか讀めない。それを拾つて讀んで見ると、例へば「一同」圓などはいゝが「盪」などといふ妙な

文字も現れてゐる。それが何かの意味の深い謎ででもあ
るやうな氣がするのであつた。「蛤かかな」といふ新聞の俳句
欄の一片らしいのが見つかつた時は、少しをかしくなつて
來て、ついひとりて笑つた。

紙片の外に、まださまざまの物の破片がくつついてゐた。
木綿絲の結び玉や、毛髪や、動物の毛らしいものや、ボール紙
のかけらや、鉛筆の削り屑、マッチ箱の破片、こんなものは容
易に認められるが、中にはどうしても來歴の分らない不思
議な物件の斷片があつた。それから或植物の枯れた外皮
と思はれるのがあつて、その植物が何だといふことが、どう
しても思ひ出せなかつたりした。

Board
ボール

これらの小片は動植物界のものばかりでなく、礦物界から
のものもあつた。斜に日光にすかして見ると、雲母の小片
が銀色の鱗のやうにきら／＼光つてゐた。

段々見て行く中に、この澤山な物のかけらの歴史が可なり
に面白いもののやうに思はれて來た。何の關係もない色
色の工場で製造された種々の物品が、さまざまの道を通つ
て、或家の紙屑籠で一度集合した後に、又他の家から來た紙
屑と混合して、製紙場の槽から流れ出すまでの經路に、どれ
程の複雑な世相が纏綿してゐたか。かう一枚の淺草紙に
なつてしまつた今では、再びそれをたどつて見やうはなか
つた。私は唯漠然と、日常の世界に張渡された因果の綱目

| | | | | | |
|--------------------------|--------|----------------------------|--------|------------------------|-------|
| Montaigne (1533-1592) | モンテーニュ | Shakespeare (1564-1616) | シェクスピア | Emerson (1803-1882) | エマーソン |
| 家 佛國の思想 | | 詩人 曲家 英國の大戯 | | 詩人 米國の思想 | |

の、限りもない複雑さを思ひ浮べるに過ぎなかつた。あらゆる方面から來る材料が一つの釜で混ぜられ、こなされて、それから又新しい一つのもものが生れるといふ過程は、人間の精神界の製作品にもそれに類似した過程のあることを聯想させない譯にはいかなかつた。そのやうな聯想から、私はふとエマーソンが「シェクスピア論」の初に書いてある言葉を思ひ出した。「價值のある獨創は他人に似ないといふことではない。最も大いなる天才は最も負債の多い人である。」こんな意味の言葉が想ひ出された。それから又或盲目の學者が、モンテーニュの研究をする爲

に採つた綿密な調査の方法を想ひ出した。彼はモンテーニュの論文を悉く點字に寫し取つた中から、あらゆる思想や、警句や、特徴や、挿話を書抜き、分類し、整理した後、更にこの著者が讀んだであらうと思はれるあらゆる書物を讀んだり、讀んで貰つたりして、その中に見出される典據や類型を拾ひ出したといふ。私はこの盲人の根氣と熱心とに感心すると同時に、その仕事が多事ごとく、私が今紙面の斑點を搜してはその出所を詮索したのに似通つてゐるやうな氣もした。どんな偉大な作家の傑作でも――寧ろさういふ人の作ほど豊富な文獻上の材料が混入してゐるのは當然であつた。それを詮索するのは興味もあり有益なこと

でもあるが、それは作と作家との価値を否定する材料にはならなかつた。要は資料がどれだけよくこなされてゐるか、不浄なものがどれだけ洗はれてゐるかにあつた。

魔術師でない限り、何も無い真空から假令一片の浅草紙でも創造することは出来さうに思はれない。しかし紙の材料をもつと精選し、もつとよくこなし、もう一層よく洗濯して、純白な、平滑な、光澤があつて堅實な紙に仕上げることは出来る筈である。マッチのペーパーや活字の断片がそのまゝ、眼につく内は、まだ改良の餘地がある。(多彦集)

一七 豊臣太閤 三上参次

三上参次

歴史家
文學博士
東京帝國大學名譽教授
帝國學士院會員
慶應元年(一五三三)
播磨國(兵庫縣)生

眞書太閤記

三百六十卷
作者未詳
繪本太閤記

三國志

通俗三國志の略
七十五卷
三國志を演義したもの

漢楚軍談

通俗漢楚軍談の略
十五卷
夢梅軒草著

漢の劉邦と楚の項羽との争覇の顛末を記述した

もの



豊臣秀吉 伯爵伊達宗彰藏

從來豊臣太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、これらの書には武邊の偉人としての太閤は稍、描き出されたれども、その他の側面は殆ど全く忘却せられたる如く、間、又いみじき誤謬をさへ傳へたり。

太閤が無學文盲の人なりと傳へられたるが如き、その最も著しき例證なるべし。

磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し。眞に偉大なる人物は、子細に研究するに従ひて一層その光彩を放つものなり。予は今、太閤が一面には雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に舊大名たりし華族の諸家、古社寺、舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、その幾許なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一、大村法橋由己等の文章家の手に成りたると思しき、雄健にして生氣に富める文書その大部分を占めたりと

鑽れば愈、堅し。類淵喟然トシテ嘆ジテ曰ク、之ヲ仰ゲバ彌、高ク、之ヲ鑽レバ彌、堅シ。之ヲ瞻レバ前ニ在リ、忽焉トシテ後ニ在リ。(論語、子罕篇)

太田和泉守

尾張の人

豊臣秀吉に仕へ

大村法橋

播磨の人

柴田勝家及び豊臣秀吉に仕へた

大政所

攝政關白の母の稱

浅野氏

杉原某の二女

浅野長勝の養女

北政所

浅井氏

浅井長政の長女

茶々

淀君

江村專齋

名は宗貞

儒醫

寛文四年(三三)

歿

年百二十

醍醐

今の京都市伏見

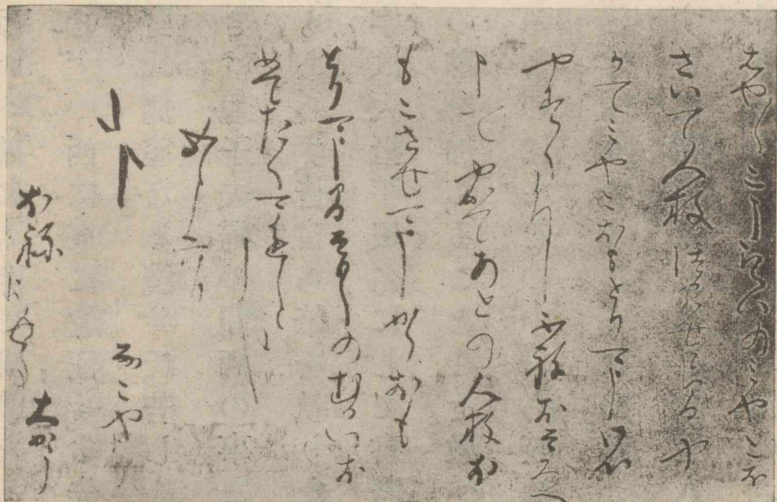
區醍醐

醍醐寺の所在地

はいへ、確に太閤の自筆なる色紙、短冊、消息の類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先より、母なる大政所、夫人なる浅野氏、側室なる浅井氏、若しくは秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。書狀に用ひたる文字は大抵平假名にして、書體及び筆力に清婉秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る圓熟したるものにて、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、その崩し方も無下に卑しからず、嘗て習字せしこと無き人の決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の

筆蹟

はやくこうら
いのみやこお
(を)さいて人数
つかはせ候間や
がてみやこお
(を)もとり可申
候御心やすく候
べく候ふねお
(を)そろへ申候
てやがてあとの
人数お(を)もこ
させ可申候から
(唐)お(を)もと
り可申候間そも
じのむかい(ひ)
お(を)めでたく
可進之候
かしこ
五月六日
なごやより
大かう
おねに返事



豊臣秀吉古筆書時代鑑

醍の字を忘れて、とみには思
ひ出でざりしを「大の字を書
けよ」といひし談を記せるは、
太閤の簡易を喜び、敏捷を尙
びしをいへるにて、少しも漢
字を知らざりしをいへるに
は非ず。軍陣にての消息などは、咄嗟
に文章を成したるにて、字句
の洗煉なしといへども、天真
爛漫、辭簡にして意達し、少し

小田原在陣
後陽成天皇の天
正十八年(三五〇)
八月秀吉は自ら
北條氏政を小田
原城に攻めた

も凝滞する所なし。而して、その間に溢るゝばかりの眞情
あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小
田原在陣の折、大政所に上りし書の中に、「そもじさまは御ゆ
さん候うて、きをもなぐさみ、わか御なり候うて給はるべ
く候。たのみ申候。の語あり。千言萬語を費すとも、子の親
に對する眞情はこの「若くなり給はれ」の一語より適切なる
ものはあらじ。又その夫人淺野氏への書には、「ねんごろに
文給はり、御げんさんのこゝちしてねんごろにみまおらせ
候。ことし内にはひまあけ參るべく候。心安く候べく候。
必ずとし内に參り候うて御目にかゝり、つもる御物がたり
申すべく候。等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の

撥亂反正

亂世ヲ撥キ諸ヲ
正ニ反スハ、春
秋ヨリ近キハ莫
シ。(公羊傳)

天正十四年

正親町天皇の御
代(三三三)

小田原

中にも、かしこゝに太閤の口授に係れりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを愛でて、その下に徘徊せり。正親町天皇遙かにこれを見そなはしてにや、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製を

添へて下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、即ち

しのびつゝ霞とともにながめしもあらはれけりな花の
木のもと

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へることありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却つて淡雪のちらちらと降來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は花をおそしとさそひ來
ぬらむ

と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

龍安寺

山號は大雲山
臨濟宗の名刹
京都市右京區
仁和寺の東北

文祿三年

後陽成天皇の御
代(三五四)

關屋の花

吉野の山口の六
田から吉野の總
門までの花

藏王堂
今の金峯神社
吉野山中金峯山
下にある
本尊は金剛藏王
権現

紀州征伐
天正十三年(三三)
吉秀吉が紀伊の
根來寺を攻めた
戦
玉津島
和歌山市の南四
軒

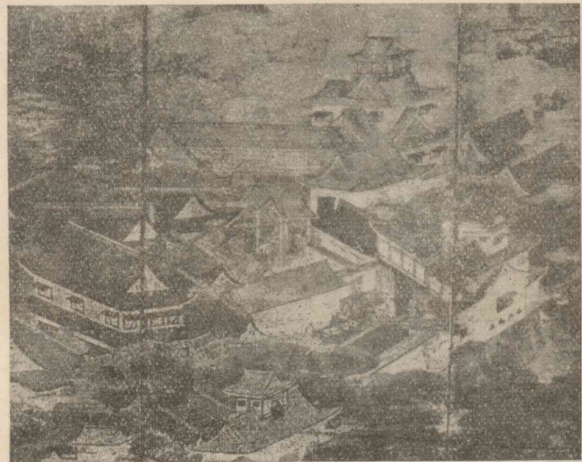
吉野山たれとむるとはなけれども今宵も花のかけにや
どらむ

と詠じ、藏王堂にては、

かへらじとおもふ家路を
入相のかねこそ花のうら
みなりけれ

と歌はれたり。巧を弄ばず
してなかくに雅趣に富み、
格調も亦平凡ならずして、古
の撰集の中にも置きたき心地せらる。

この他紀州征伐の時には和歌浦・玉津島にて、小田原陣のを



第 樂 聚



藏熊楠屋土 見花の醐醍

名護屋

佐賀縣東松浦郡

名護屋村

聚樂第

今の京都市上京

區中立賣大宮邊

に出來た太閤の

新邸

大佛

奈良東大寺の大

佛殿

古英雄

魏の曹操

曹氏父子(曹操・

曹丕)鞍馬ノ間

文ヲ爲ル。往々

槩ヲ横タヘテ詩

ヲ賦ス。(舊唐書

杜甫傳)

慶長三年

後陽成天皇の御

代(三五〇)

りには清見瀉にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての
 歌詠も少からず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは
 勿論醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては
 大宮人の昔を偲ばしめ、又時としては古英雄の横槩賦詩の
 面影を想はしむ。而して功成り名遂げたるこの千古の偉
 人も、亦無常を感じたることのありてにや、
 露とちりしづくと消ゆる世のなかに何とのこれる心を
 るらむ
 と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あ
 はれにも、
 露とおち露と消えにし我が身かなにはのことも夢の

伊達政宗

仙臺藩の祖
寛永十三年(三三)

〆薨

年七十

贈従二位

細川忠興

幽齋藤孝の長子
關ヶ原役の功に
よつて豊前四十
萬石に封ぜられ

た

正保二年(三〇五)

薨

年八十二

贈正三位

また夢といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに太閤は伊達政宗、細川忠興等と同じく、その頃の武人にして文藻ありしうち、の錚々たる者なりしなり。たしかに太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして、予が原本を目撃したるものみにても、二三十はあるべし。しかのみならず、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめてこれを聴き、又禪學の書の講義をも聴きたりき。我が國人が誇るに足るべきこの大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。

(豊太閤に関する研究)

湯淺常山

名は元禎

江戸時代の儒者

岡山藩士

天明四年(三四一)

歿

年七十四

塚
今の大阪府堺市

一八 曾呂利が頼才

湯淺常山

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ」と問ひけるに、對ふるやう、「臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申し候」。太閤「さては奇なる姓もあるものかな。してその曾呂利と申す姓には何ぞ謂はれにてもありつるものか」と問ひけるに、又對ふるやう、「聊か謂はれこれあり候。別にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして、そろりと入り、敢へてつかへず。これを以て曾呂利と申し候」。太閤「これは奇なり、又折節來るべし」。他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申せしな」。對へて曰く、「曾呂利、曾呂利、新左衛門、新左衛門」。

太閤怪しみてその重言かまはじを尋ねけるに、新左衛門の對ふる様、
「殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も
亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て對へ候なり。」

新左衛門或時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の香を嗅がせ
られたし」とありければ、太閤

はいぶかしく思ひ、「こやつ又
何をか爲すらん」と疑ひしが、

「何はともあれよろし、汝がよ

きに嗅ぐべし」と許しけり。その後諸大名の御機嫌伺に出
づる時を窺ひ、太閤の耳根みみもとに口寄せて、何やら言ふ體なれば、
皆々心中ひそかに驚き、「かやつ何を言ふらん。若しや我を



曾呂利新左衛門
曾呂利新左衛門
曾呂利新左衛門
曾呂利新左衛門

讒言するにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛し給
ふ所なれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも測られず」と
憂ひ、各、わが邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて密に
曾呂利が方へ贈りけるに、ぞ、數日にして金銀財寶山の如く
集りける。やがて太閤の御前に出で、謝して言へるやう、「殿
下一日の御耳を拜借し、そのかうばしき香を嗅ぎたる效能
によりて、金銀財寶山の如く集り來りて殆ど坐する餘席こ
れなく候。これ全く殿下御耳の效能なり」と言ひければ、太
閤も亦呆然として驚きけりとなん。
或日、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗るその効ありける程に、
「何なりとも汝の望むものを取らせん」と仰ありけるに、新左

衛門の言へるやう、臣敢へて大いなる望もこれなく候。唯紙袋二つほど米を賜はりたし。太閤「そはいとく易きことなり。餘り寡欲の至ならずや」と仰ありけるに、新左衛門「これにて澤山に候」と申して退出せり。數日の後、二つの大いなる紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で、「前日御約定の米これに賜はりたし」とて、米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれにはあきれて、しよしことば言句もなかりけるとぞ。程經て見厭きたりとて、太閤嘗て金銀の蟹を數多鑄造らせ、これを庭の泉水又はその近邊に放ちて樂しみとしけり。程經て見厭きたりとて、近臣の者に「何ぞ一用を言出づる者にはこれを與へん」と仰

せけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣はこれを紙押かみおしになさん」と言ひ、「臣は金の茶釜の蓋もなければ、せめてはこれを以てその蓋の取手になさん」と言ひ、「何と言ひ、かと言ひて各、一箇づつ賜はりけり。新左衛門の乞ふやう、臣は人の角力も既に見厭きしことなれば、この蟹を集へて角力を致させんと存ずるなり」といひければ、太閤は「角力とありては、五箇や十箇にてはその興薄かるべし。悉く持行くべし」と、残れる蟹を皆新左衛門に與へけりとなん。その頓才實に驚くべく、感ずべし。(常山紀談)

槍岳
長野・岐阜の縣境に跨る日本アルプス中の最高峰
海拔三千百七十八米
芥川龍之介
文學者
東京生
昭和二年歿
年三十六

一九 槍岳へ 芥川龍之介

山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから何匹かの獣が走りだした。

「畜生！ 鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、忌々しさうに舌打をしながら路ばたの橡とちの大木を見上げた。橡の若葉が重り合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の小猿をつれた親猿が、しづかに私たちを見下してゐた。私は物珍しい眼をあげて、その三匹の猿の徐に梢を傳つて行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立去りがたいやうに、橡の梢を仰ぎながら、磔を拾つて投げたりした。

橡



「おい、行かう。」

私はかう彼を促した。彼はまだ猿を見送りながら、濼々歩きだした。私は多少不快であつた。

路は次第に険しくなつたが、馬が通ると見えて、馬糞が處々に落ちてゐた。さうしてその上には、蛇目蝶が濼色の翅を合はせたまゝ、何羽もぎつしりとまつてゐた。

「これが徳本の峠です。」

案内者は私を顧みて言つた。私は小さい雜囊の外に何も

蛇目蝶



徳本峠

長野縣島々から
上高地へ行く路
にある峠
海拔二千四百餘
米
日本アルプスの
一關門



峠 本 徳

荷物のない體であつたが、彼は食器や食糧の外にも、私の毛布や外套などを堆く背負つてゐた。それにもかゝらず、峠へかゝると、彼と私との距離はだん／＼遠く隔りはじめた。三十分の後、とう／＼私はたつた一人山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠の空氣は無氣味な静寂を包んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇目蝶と、蘆を煽つて行く私と、それがこの急な路の上に生きて動いてゐる總べてであつた。

と思ふと、鈍い翅音がして、青黒い一匹の馬蠅が、べたりと私の手の甲にとまつた。さうしてそこを鋭く刺した。私は一打にそれを打殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。」

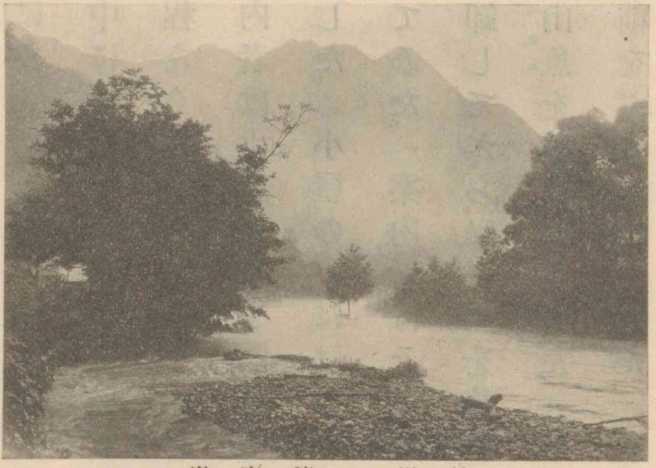
梓川

長野縣安南曇郡
槍岳と常念岳と
の間から出る川
下流は犀川といふ

上高地附近



山毛櫨



梓川と穂高嶽

そんな迷信じみた心持が一層私をわく／＼させた。私は痛む手を抱へながら、無理やりに足を早めだした。

その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒涉した。川を埋め残した森林の上には、飛驒・信濃境の山々が、殊にうす曇つた穂高嶽が、嶄然と私たちを見下してゐた。私は無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹の中へ辿り着いた。對岸には大きな山

雁皮



山魚



毛櫛ひげや櫛かみがうす暗く森々と聳えてゐた。稀に熊笹が疎らになると、雁皮らしい花の黄色く咲いた、湿氣の多い草原の中に、放牧の牛馬の足跡が見えた。程なく一軒の板葺の小屋が熊笹の中から現れて來た。案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ卸した。小屋の中には大きな圍爐裡が寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた長い釣竿を取卸してから、私一人を後に残して、夕飯の肴のために梓川の山魚ヤマイサを釣りに行つた。私は藪や雜囊を捨てて、暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると、熊笹の中から、大きな黒斑の牛が一匹のそく側へやつて來た。私は稍不安になつて、

白樺



小屋の戸口へ退却した。牛は潤んだ眼をあげて、じつと私の顔を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり巻煙草に火をつけた。曇天の夕焼が消えかゝつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に刺して炙つた山魚を肴に、鍋で炊いた飯を食ひ食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を巻いて作つた原始的な燈火をともしながら、



白樺の林

夜が戸の外に下つた後も、いろく、山の事を話し合つた。白樺の火と櫛はたの火と、この明暗二種の火の光は、既に燈火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話のときれた時には、今更のやうに原始時代の日本民族の生活などを想像せずにはゐられなかつた。

雑木の重り合つたのを排いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者は私を顧みながら、

「此處が赤澤です。」

と言つた。私は鳥打帽を阿彌陀にして、眼の前に開けた光景を眺めた。

私の前に横たはるものは、立體の數を盡くした大石であつた。それが狭い峡谷の急な斜面を満たしながら、空を劃つた峯々の向ふへ、目の届くかぎり連なつてゐた。もし形容の言葉をつけるならば、小さい私たち二人は、正に遠い山嶺から漲り落ちる大石の洪水の上にあるのであつた。

私たちはこの大石の溢れた谷を、「黄花駒の爪」の咲いてゐる谷を、蟲の這ふやうに登りだした。暫く苦しい歩みを續けた後、案内者は突然杖をあげて、私たちの左手に續いてゐる絶壁の上を指しながら、

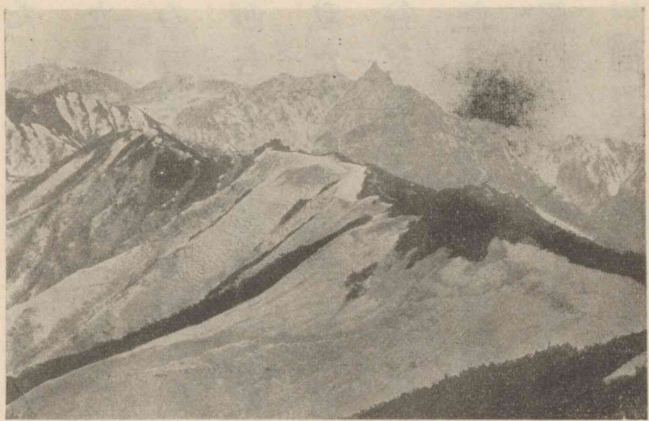
「御覽なさい。あすこに青猪あせがゐます。」

と言つた。私は彼の杖に沿うて視線を絶壁の上に投げた。



黄花駒の爪

羚羊



槍 岳

すると、荒削りの山の肌が、頂に近く偃松の暗い線をなすつた處に、一匹の獸が小さく見えた。それが青猪といふ異名を負つた日本アルプスに棲む羚羊かみしやであつた。やがてその日も暮れかゝる頃、私たちの周圍には、次第に残雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擡げた寂しい偃松の群も見え始めた。私は時々大石の上に足を止めて、何時か姿を露しだした槍岳の絶巔を眺めやつた。絶巔は大きな石

金無垢の月。

入海の波間にも

また月はしづきゆく。

沈々と

金の鉤。

金無垢のするどさよ、

絹漉きぬごしの雨ののち、

しんじつに

走りいづるその蒼さ。

島黒く、海黒き

眞の闇

舟一つすゝみゆく、

その上にほそき月、

なにかわかね、

魚族は目をさまし、

鈴蟲は一心に鳴きしきる、

虔ついでのきはまり。

闇の夜は斷崖も、松の木も

かげわかず、ゆく舟も見えわかず、

たと光るほそき月、

金無垢のほそき月、（細の祭）

二 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出来て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡くしけれども、その驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思し召しけるにや、宗徒しゅうとの御家人等召集めて御跡の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々

本多重次

通稱は作左衛門

徳川氏の重臣

文祿五年（二三五）

歿

年六十八

新井白石

名は君美

徳川時代の大儒

政治家

享保十年（二六六）

卒

年六十九

贈正四位

天正十三年

正親町天皇の御

代（三四五）

徳川殿

徳川家康

に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣くく、申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔この病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上醫療その詮なし。且は命を惜しむに似たり」とて用ひ給はず。重次大いに怒つて、「かほど大事の腫物軽々しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫して治し参らせんとするをも用ひ給はず、亡せたまはんこと、御心がらとは言ひながら、あつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬと申す上は、彼いかでか治し参らすべき。年老

いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先へ参らん」とて御前を罷り立つ。



新井 白井 石蔵
東京 皇室 博物館 蔵

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出て引留め、仰せらるべき旨あらせられ候」といふ。重次大いに聲を怒らして、「最後の暇乞うて罷り申す者を見

苦しい殿ばらの止めやうや」と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めね」と申せとは、

おとなしくも候はぬ本多殿といはれて、げにさも候。とて御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果てぬに、縦ひ家康が命終るとも、汝等が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとすることやある。と仰せければ、いやく、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、その詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたは

御塔
家康の女塔北條氏直
天正十九年(三五)
一〇卒
年三十

といふ程のかたはは、重次が身一つに餘つて、世に交はらんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れも敬ひもせらるれ。殿の亡くならせたまひなば、他人までも候まじ、まづ御塔の北條殿、我が國々を取らんとし給はん、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に、忽ち別れて氣後れしは、かゝしき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと、亦踵を回らすべからず。重次それまで存へて、あの年よつたるかたはものは徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世に恥をさらすらん。と後指さされんこと、老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。この頃までも武

武田
武田勝頼
天正十年(三三三)
織田・徳川の兩軍に攻められ天目山で自殺した年三十七

田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手を下げ腰を屈めしを、世にもあはれに思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候と申す。

「汝が言ふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに到りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生殘つて、後の事よきにはからふべしと存ずるや否や」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰に背くべきと申す。「さらば、醫師召させよ」とて、召さ

森 鷗外

名は林太郎
文學者・醫學者
文學博士・醫學博士
陸軍軍醫總監
東京帝室博物館長
石見國(島根縣)津和野生
大正十一年薨年六十一

國分寺

丹後國(京都府)加佐郡由良町の南四軒中山にあつたといふ
由良附近



る。

醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛覺えさせ給はねば艾を増加ふること多くして後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水・血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。(灌翰譜)

三 厨子王

森 鷗外

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠

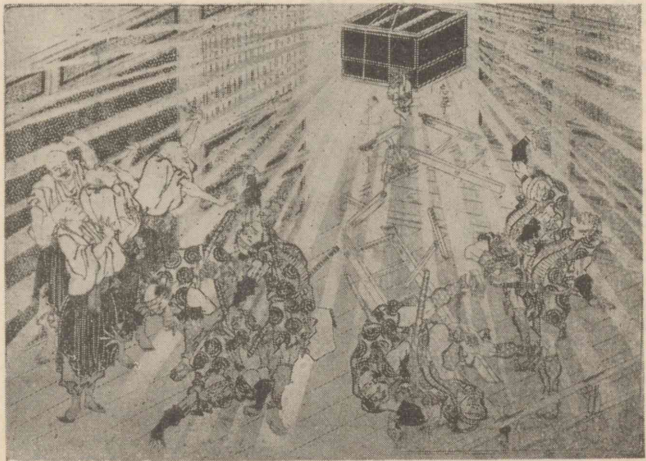
山椒大夫
 丹後國(京都府)
 加佐郡由良町石
 浦に住んで多く
 の奴婢を虐使し
 てゐた長者だと
 いふ
 三郎
 山椒大夫の五子
 のうち三郎が最
 も暴戾であつた

みいつて来る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挟んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に言つた。「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人がこの山に逃込んだのを確に認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐこゝへ出して貰はう。」
 附いて來た大勢が、「さあ出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。その石疊の上には、今手にく松明を持つた三郎の手のものが押合つてゐる。また石疊の兩側には、境内に住んでゐるかぎ

りの僧俗が、ほとんど一人残らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも庫裡からも、何事が起つたかと怪しんで出て來たのである。
 初め討手が門外から門をあけいと叫んだ時あけて入れたら亂暴をせられはしまいかと心配して、あけまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師があけさせた。しかし今、三郎が大聲で逃げた奴を出せと言ふのに、本堂は戸を閉ぢたまゝ、暫くの間ひつそりしてゐる。
 三郎は足踏をして、同じことを二三度繰返した。手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。



山椒夫榮華物語

やうくの事で本堂の戸が静かにあいた。曇猛律師が自分であけたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い岩乗な體と眉のまだ黒い廉張つた顔とが、揺めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騒がしい討手の者も、律師の姿を

見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞えた。

「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、その者は當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押寄せて參られ、三門をあけいといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思つて、三門をあけさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。」

東大寺
日本總國分寺
聖武天皇御建立
奈良七代寺の一
華嚴宗の大本山
本尊は所謂奈良
の大佛である

そこをよう思うて見て、早う引取られたが好からう。悪いことは言はぬ。お身たちのためぢや。」かういつて、律師はしづかに戸をしめた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。しかし戸を打破つて踏込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁きはしてゐる。

この時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつばぢやらう。それならわしが知つてゐる。」三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、この寺の鐘樓守である。親爺は詞を繼いでいつた。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てゐると、築

泥ヂの外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け」といつて、三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寢ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛立つた。

中二日置いて曇猛律師は田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖をついてゐる。後からは、頭を剃りこくつて、僧衣を着た厨子王が附い

田邊
今の京都府加佐
郡舞鶴町

朱雀野
京都市下京區七
條千本通の邊
昔の朱雀大路の
名残

清水寺
京都市の東山に
ある寺
本尊は觀世音菩
薩
烏帽子直衣姿



てゆく。
二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。やがて山城の朱雀野に来て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。

「守本尊を大切にしていって、往け、父母の消息はきつと知れる。」と言聞かせて、律師は踵を回らした。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

籠堂に寝て、あくる朝目が覺めると、直衣ちしに烏帽子を着て指貫ゆびぬきを穿いた老人が枕元に立つてゐた。「お前は誰の子ぢや。

何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞおれに見せてくれい。おれは娘の病氣平癒を祈るために、ゆうべこゝに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寝てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいといふことぢや。けさ左の格子に来て見れば、お前がある。どうぞおれに身の上をあかして、守本尊を貸してくれい。おれは關白師實ぢや。」

師實
關白太政大臣藤
原師實
後三條・堀河兩
天皇に仕へた
康和三年(七六一)
薨
年六十一
安樂寺
古筑前國(福岡
縣)筑紫郡宰府
町太宰府神社の
地にあつた
姉
名は安壽

厨子王はいつた。「わたくしは陸奥掾正氏といふものの子でございます。父は十二年前筑紫の安樂寺へ往つたきり還らぬさうでございます。母はその年に生れたわたくしと三つになる姉とを連れて岩代の信夫郡しんぶに住むことにな

由良で
安壽は弟厨子王
を山椒大夫の許
から逃れ去らし
めた後入水して
死んだ

放光地藏
五穀成就の願を
旨とする地藏菩
薩



高見王
桓武天皇の皇子
葛原親王の御子
平氏の祖

りました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐しい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしは丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくなりました。わたくしの持つてゐる守本尊はこの地藏様でございます。かう言つて守本尊を出して見せた。師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打返しく、丁寧に見て言つた、これはかねて聞及んだ尊い放光地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされた。これを持ちつたへてをるからは、お前の家柄に紛れはない。

永保
白河天皇の御代
(七四一—七四三)
違格
法規に違背する
こと

除目
任官の儀式
秋の除目は中央
政府の官吏を任
命し春の除目は
地方官を任命す
るのが常であつ
た

仙洞がまだ御位にあらせられた永保の初に、國守の違格に連坐して筑紫へ左遷された平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。おれと一緒に館へ來い。師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免状を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。しかし使が往つた時は、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名のつてゐた厨子王は、身が窶れる程歎いた。その年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買をさしとめた。そ

ここで山椒大夫も悉くその奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。

大夫の家では一時それを大きな損失のやうに思つたがこの時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はいよゝゝ富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられた。



森 鷗 外

假寧
官吏に賜ふ休暇

雑太
佐渡國雜太郡
今の新潟縣佐渡
郡雜太町
佐渡島の中部
國府川のほとり

佐渡の國府は雜太といふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立並んだ處を離れて、畑中の道にかゝつた。空は好く晴れて、日があか〜と照つてゐる。正道は心の中に、どうしておかあ様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで、逢はせて下さらないのではあるまいか、などと思ひながら歩いてゐた。ふと見れば、だいぶ大きな百姓家がある。家の南側の疎らな生垣の内が、土を敲き固めた

廣場になつてゐて、その上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈取つた粟の穂が干してある。その真中に檻褌を着た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。正道はなぜか知らず、この女に心が引かれて、立止つて覗いた。女の亂れた髪は塵にまみれてゐる。顔を見れば盲である。正道はひどくあはれに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞分けられて來た。それと同時に、正道は瘡病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾うく逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、この詞に聞惚れた。そのうち臟腑が煮えかへるやうになつて、獸めいた叫が口から出ようとすると、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駈込んだ。そして足には粟の穂を踏散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手に守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押當ててゐた。女は雀でない、大きなものが粟をあらしに來たのを知つた。

そして、いつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でじつと前を見た。その時、干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤が出た。女は目が開いた。「厨子王」といふ叫が女の口から出た。二人はびつたり抱合つた。(鷗外全集)

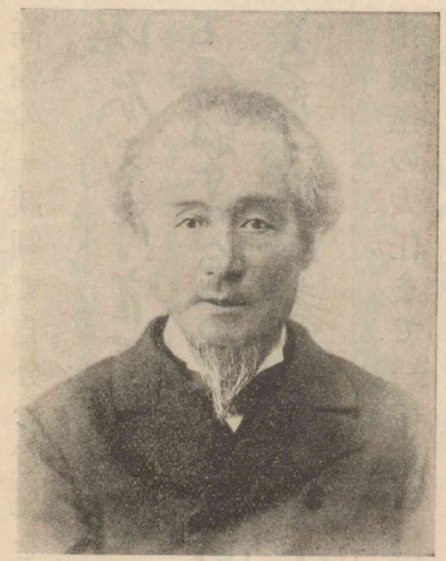
二二 氷川清話

勝海舟

勝海舟
名は安芳
政治家
舊幕臣
海軍卿
樞密顧問官
伯爵
明治三十二年(三
五)薨
年七十七

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも来い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて来るものだ。何でも大膽にかゝ

らなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつては、もういかぬ。若し一度で出来なければ、何度



勝海舟

でも出来るまでやり通す。とかく世間の人は、事業の成就する前に、根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出来ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信

によつて、知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が来て、これまで敵視してゐた人の中にも、互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出来

西郷南洲

名は隆盛

明治維新の元勳

参議

陸軍大將

明治十年(三三七)

戦歿

年五十二

贈正三位

筆蹟

戊辰三月官軍の先鋒品川に至る十五日を期して侵襲の令ありと同日書を送り一見を希ふ余高輪薩摩の邸に到る

るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。

そこに行くくと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全

以辰三月官軍先鋒品川に至る十五日を期して侵襲の令ありと同日書を送り一見を希ふ余高輪薩摩の邸に到る

勝海舟筆友帖

市鎮撫の大任まで一切自分に任せて、少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。その度胸の大きいには自分もほとく感心

筆蹟

尊諭拜誦仕候陳れば唯今田町迄御來駕成し下され候段御知らせ下され早速罷り出で候様仕る可く候間何卒御待居り下され度此の旨御受迄此の如くに御座候

三月十四日

西郷吉之助

安房守様

拜復

号細相清を信
望々田丁近所未だ
ふみり候カ知ら
あはれをうけ仕る
ゆきのつねに
あはれをうけ仕る
三月十四日

西郷南洲書翰

した。

官軍が品川まで押寄せて来て、いまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝、田友町の薩摩屋敷までその談判にやつて来た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたのみで出かけた。まづ一室へ案内されて暫く待つてゐると、西郷は庭の方

から古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來た。「これは遅刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。その様子は、少しも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈々談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、その間に一點の疑念をも挿まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受けします」と、かういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈もその生命財産を保つことが出來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、「いや貴様のいふことは自家撞着だ」とか、「言行不一致だ」とか、「澤山の暴徒があ

通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある」とか、色々喧しく責立てるに違ない。さうなると、談判は忽ち破裂だ。しかし、西郷はさすがにそんな野暮は言はない。よく大局を達觀する明と、大事に處する斷とをもつてゐた。



西郷 南 洲
ヨ ソ ネ

談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑の近傍には官軍の兵隊がひしひしと詰めかけてゐる。實

桐野
桐野利秋
鹿兒島の人
西南役の勇將
明治十年(二五三)
城山に敗死した
贈正五位

連は、大勢次の間へ來て、竊に様子を覗つてゐる。薩摩屋敷

に殺氣陰々として、物凄しい程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものの如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集してゐた兵隊はどつと一時に押寄せて來たが、自分が西郷に送られて立つてゐるのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

この時自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣に接するだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に置き、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より

少しもなかつた。外國の事情などは自分が話して聞かせた位で、或事柄の知識は自分の方が上であつたかも知れぬが、その膽の大きいことに至つては、眞に絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。(水川清話)

二四 南洲遺訓 西郷南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、作略を用ひて一旦その差支を通せば、後は時宜次第工夫の出来る様に思へども、作略の煩きつと生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なる様なれども、さきに行け

ば成功は早きものなり。

家て人生

筆蹟

敬天愛人
天ヲ敬ヒ人ヲ愛
ス
南洲書

西郷南洲筆

道は天地自然のものにして、人はこれを行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り、驕慢の生ずるも、皆自ら愛する

がためなれば、決して己を愛せぬものなり。

過を改むるに、自ら過つたとさへ思ひつかば、それにてよし、その事をば棄てて顧みず、直に一步踏出すべし。過を悔しく思ひ、取繕はんと心配するは、譬へば茶碗をわり、その破片を集め合はせ見るも同じにて、詮もなきことなり。

命もいらす、名もいらす、地位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふものは、天下舉つて毀るとも足らずとせず、天下舉つて譽むとも足れりとせず。自ら信ずること篤きがゆゑなり。



広島大学図書

0130449253

